

出藍文庫

「西木野真姫の幸福論」

「みんなで叶える物語」

近藤貴弥 作

目次

西木野真姫の幸福論……………五

みんなで叶える物語……………四九

後書き……………一一八

西木野真姫の幸福論

5 西木野真姫の幸福論

一

西木野真姫はようやく、ピアノを奏でるのをやめた。ピアノと椅子しかない殺風景の部屋に呼ばれた矢澤にこは、軽く拍手を送り、始めて口を開けた。

「どうしたの？」

真姫はそつと鍵盤から指を下ろし、にこの方を見た。その顔があまりにも悲しそうだったから、にこはあえてピアノに集中させるように頼んでみた。

「ちよつと聞いてほしかっただけよ」

「上手ね。ねえ、新曲とかあつたら聞かせて」

「仕方ないわね。全然できてないから、最初の方だけよ」

真姫は嬉しそうに笑つて、また鍵盤の上に指を置いて。それから一息ついて、弾き始めた。

6 西木野真姫の幸福論

覇気がない弱々しいスタートであった。バラードでも作るのであらうか。にこはもつと明るい曲を好んだ。情熱的で身体の芯が熱くなり、聞くんなんて作業が邪魔に感じる。そんな曲が好きだった。

旋律が止まったが、真姫の指は鍵盤の上にある。まだ終わってないのであらう。にこは思わず、そんな曲が新しい曲になってしまふのか、と言いたくなつた。だから呆れたような調子で、アイドルとは何か、と真姫にまた教えたくなつた。

が、真姫の口元に浮かぶ烈しい幸福に、にこは何も言えなくなつた。白黒の鍵盤の上で踊る指が静かで、時々動かなくなる。静止している指先までもがはつきりとした緊張感と充足に包まれていた。にこは、一人の表現者として、真姫が猛烈に羨ましく、嫉妬してしまつた。

彼女はアイドルの曲を作るとかそういうことよりも、ただ純粹に曲を奏でるのが好きなのである。今、彼女の頭の中には様々な音が流れていることだらう。熱い頭を賢明に冷ましながら、真姫は一つ一つの音を選んでいく。

本来ならば、全ての音を奏でたいのだらう。もう、真姫の中で曲は出来上がっている。それをどのようにして、にこ達に伝えるのかが問題なのだ。

相変わらず低く暗く静かで、バレエやカフェで流れているようである。輝かしいアイドルが踊り、歌う姿が全然想像できない。それでもずっと聞いてられるのは、真姫が輝いていたからである。

にこは聞きながら、こうやって真姫の曲を聞けるのもう長くないことに気づいて

7 西木野真姫の幸福論

いた。真姫も察しているからこそ、こうして二人だけの時間を作り、弾いている。おそらく、にこはおまけだろう。真姫の目はずっとピアノを見ている。大きく潤んだ目は、ピアノから離れない。

にこは悟った。真姫がピアノを弾くのは、もうこれが最後なのだ、と。にこは曲の途中でも口を挟んだ。

「ねえ、真姫ちゃん、一つ訊いていい？」

真姫は何も言わず、無我夢中にピアノを弾く。喜んで見ていたが、段々と真姫の表情に影が帯びいくように映った。

幸福と不幸の狭間で、真姫はこれからも生きるのでしょうか。きつと真姫は、これまでも何事にも好きにならないように生きてきたのであろう。好きになればなるほど別れるのが惜しくなる。ゆえに意識して、冷静を努めて、真姫は真姫であろうとした。品の良いお嬢様であり続けた。

そんなことは、まだ真姫が味わうことではない。にこですら味わうものではない。もつともつと先、大人になってから体験することではないのか。

「ねえ、真姫ちゃん、そんなに早く大人になる必要ないじゃない。もつと、まだまだ、子供のままでいましょうよ」

真姫の指が鍵盤から滑り落ちたのはその時であった。にこは優しく、甘えるように続ける。

8 西木野真姫の幸福論

「人生を好きで一杯にしましょうよ。笑顔があふれるような人生にしましょう。……
難しいことじゃないわ」

青い理想であろうか。にこはそういう人生を歩む気である。その一生に辛いことや
苦しいことがあるわけではない。それでも表情に出さなだけである。にこはアイド
ルになるのだから。

真姫は悲しそうに困った顔をした。

「無理よ」

にこは至つて真剣な調子で返した。

「どうして？」

「私は、そんな子じゃないのよ。誰かの幸福の影には、誰かの不幸があるのよ。仮面
を被つて、そんなことありません、つて偽っているだけなの。だったら私は、最大多
数の幸福のために、不幸になるわ」

にこは真姫の諦め悟つた言葉が腹立たしかった。真姫は思っていたより、幼く、に
こよりもずっと子供であった。

何かを捨て、割り切ることが大人になるということならば、にこは永遠に子供であ
ろう。真姫のように自らを犠牲にしてまで大人になりたくない。何よりもにこが許せ
なかつたのは、将来を不幸だと言いつつ切ったことにある。

「不幸って何よ？ ……あんた、なりたいたんじやないの？ それが不幸って、本気で
言つてんの？」

まだ変えられる。死ぬその時まで変えられる。ピアノと星を愛する女医がいても良い。素敵な女性ではないか。赤毛の髪がよく似合う知的な、輝かしい女医だ。

真姫は意外なまでに冷めた声を上げた。

「ええ、私にはこの道しか残っていないのよ」

にこは逆上しそうになった。が、真姫の口からずっと抑えていたのであろう嗚咽が漏れ、言葉を奪われた。白い頬を伝い、鍵盤の上に落ちた幾つもの涙。部屋は静かになった。

それでも、そこまでしてでも、親のために生きなければならぬのか。果たして、真姫の将来は、人生は、真姫だけのものなのだろうか。

にこは真姫だけは、たとえ親のために医者になつたとしても、真姫だけは幸福になつてほしかった。にこは優しく微笑み、そつと囁いた。

「ねえ、真姫ちゃん、私だけは幸せにしてね。いつか、真姫ちゃんのお世話になるから」

「にこちゃんの幸せって何よ……」

「ふふ、内緒。ずっと先、私達が大人になつた時に教えてあげる」

防寒を一つでも怠れば、浜風は容易く身体を冷やす。浜辺は夏が過ぎると、全然人の気配がしなくなる。穏やかな波の音だけが残っている。だからこそ真姫は、そういう日に限って、重いコートを羽織ってでも、来る。天体望遠鏡を砂浜に置き、星空を眺める。

星が輝いて見えるのは、夏だけではない。冬は人間達が小ぢんまりと静かになるためか、星空は随分と賑やかであった。

真姫はむしろ冬こそ、星が最も輝ける時期だと思っている。空気が冴え、透明感が増すから、とどこかの本で読んだ記憶があった。その本にはいくつもの星雲の写真が紹介されていた。

その中でも真姫の目を奪ったのは、薔薇のように赤い星雲、バラ星雲であった。南の空に、肉眼では見えないすが、確かに広がっているらしい。

しびれを切らしたように、砂浜に座るにこの厳しい声が飛んできた。

「まだだ？」

「まだよ。静かに待てないの？」

真姫は天体望遠鏡を覗きこんだまま、素っ気なく返した。にこは疲れたように溜め息をついた。

何故、にこが着いて来たのか、真姫には全然分からなかった。にこ曰く、大学受験

が終り、暇だから、ということらしい。寒く、時間がかかることも説明したのだが、真姫の後ろを着いて来た。

真姫は一人で、誰にも邪魔されず、静かに星が観たかった。好きな時に望遠鏡から離れ、肉眼で星を観るのも良い。冬の海に物思いに耽るのも良い。そういう自由な時間を使い方は、二人になるとすぐに難しくなった。

真姫が惚れ惚れとした声を上げたのはその時であった。南の空、天の川が流れている中に、赤い薔薇の房の如し星雲が現れた。

バラ星雲以外にも、星の海は広がり、輝かしい星の数々は光を散らし、波のように揺らいでいるように見えた。

この時だけは至高で、真姫は確実に満足感というのを覚えていた。が、その時、この言葉が鮮明に蘇ってきた。

にこの人生の幸福は、にこが自ら動き、得られる。これを真姫自身へと返せば、真姫も、にこの言うような、幸福な人生を歩めるのではないだろうか。丁度、今のよう。しかし一体、真姫にとつて、幸福な人生とは何なのであるうか。この時が幸福で、好きでいられるのならば、こういう時で満たせばいいのだろうか。

真姫は自然と望遠鏡から目を離し、無意識的にこを一瞥した。相変わらずつまらなさそうに真姫を見ている。瞬間的に言葉が飛び出してきた。

「ねえ、そんなに退屈？」

にこはしかめっ面で答える。真姫はその言葉がまるで自分自身すらそんなふうと言

われているのではないかと感じ取れ、少し悲しくなった。

「ええ、面白くないわ」

「もしかして、見たいの？」

にこの暗い目が、猫のように輝きはじめた。勢い良く立ち上がり、急いで真姫の側に寄ってくる。真姫の顔を、顔で押し退け、我先へと望遠鏡を覗く。

「ちよつと！ 真姫ちゃん、何これ！ あんた独り占めしてたの？ 左にある星は何なの？ ちよつと、真姫ちゃん、こら！ もう！ 教えなさいよ」

にこが興奮した声を上げたのはすぐだった。真姫はにこが感情的になるのを見て、自分のことのように嬉しかった。

真姫は柔らかい調子でにこに教える。

「もう、どれよ。今、何が見えているのよ？」

にこは恥ずかしそうに声を荒らげた。

「お馬鹿、そんなの分かるわけないでしょ！」

「仕方ないわね、ちよつと待ちなさいよ」

真姫はにこの見ている星空を頭の中で描きながら、一つ一つ丁寧に、まるで子供に教えるように優しく教えた。

「にこちゃん、最初に見た時、赤い、星の塊を見たでしょ？ それが南。夏に、天の川ぐらい見たことあるでしょ？ それをかなりアップにしたやつよ。」

にこちゃん、オリオン座を探しましょう。名前ぐらい知っていますでしょ？」

「当たり前じゃない。どれよ？」

「肉眼の方が良いわ」

真姫は昔を懐かしむように、指で夜空をなぞりながら答える。

「あの青白い星、見える？ あれが、シリウス。それから……」

真姫は、にこに星のことを教えながら、随分と幼い時のことを思い出していた。ピアノを始めるよりも前のことだっただろうか。真姫は母と一緒に、帰りの遅い父を病院まで迎えに行つたことがあつた。いつもより帰りが遅かつたため、真姫は母を手を引つ張り、父の病院へと急いだ。

その帰り道、父は真姫に星の話をした。病院の屋上で星が見えるらしい。あの青白いシリウスのこと、あの赤いベテルギウスのこと、あの黄色いプロキオンのこと、そういう星を中心に星座を見付けること、この空のどこかに薔薇のような雲があるということ——真姫にとって、輝かしい、流れ星のような思い出であつた。

真姫の幸せはずつと昔にあつた。真姫が何も知らなかつたからではないだろう。あの時の父は、真姫に医者になつてもらおうなどと考えず、ただ、一人の娘として愛し、育て、話したに違いない。今は、真姫を医者になるための子供、ぐらいにしか思つていないのかもしれない。

真姫が幸福になれる方法は、やはり、父と同じように医者になるしかないのではな
いだろうか。父に命じられたから叶えるのではなく、自らが幸福になるために叶えるのである。すなわち、父の願いのためではなく、真姫自身の願いのために医者という

険しい道を歩む。

真姫の声はいつの間にか止まっており、にこが不審がるように真姫の目を見ていた。冷たい風に鼻の頭が痛くなった。

「にこちゃん、私、医者になるわ」

波の音に掻き消されるように小さな声であった。が、熱の籠もった決意だった。にこは微笑して、瞬く間にこう言った。

「真姫ちゃんがそれで良いなら、あたしは止めないわ」

それから、にこはこう付け足した。
「頑張つてね、応援しているから」

真姫はその言葉に、分かっていたはずなのに拘らず、唐突に別れというのものの感じた。真姫は不意に呟いた。

「別れたくないわ……」

にこは、微笑を浮かべるだけで何とも答えなかった。

真姫は、にこのことを思うと、不安になった。自分達ではどうしようもないものが、これから先に横たわっているように感じた。

真姫は、にこが自分とは全然違う人間だったと気付いた。容姿や年齢という部分ではなく、もつと本質的は部分で、にこは他の女の子とは違った。アイドルになりたいという夢がもたらした少女らしい虚像ではない。もつと大人に近い、殆ど諦めに近いあの雰囲気は一体何なのであろうか。

にこは一体、あの心の内に何を覆い隠しているのだろうか。

「……にこが？」

にこのことを打ち明けると、絢瀬絵里は訝しむような声を上げた。久し振りに会ったのに拘らず、沈黙は意外な早さで落ちてきた。真姫は気ままずくなって、質問を変えらることにした。

「それで、大学生活はどうなの？」

「え？ 今、関係ないでしょ？ そう、にこね……。にこ、か。やつぱり、本人に訊くのが一番なんじゃない？」

真姫は思わず、溜め息をついた。

にこ本人に訊いたところで、はぐらかされるだけであつた。或いは、真姫自身に矛盾が変わる。自分に矛先が向けられると、色々と考えなければならぬことが出てくる。折角、一つに絞れたものが、またしても曖昧になってしまふ。

音ノ木坂学院を卒業したにこは、誰にも何も言わず、どこかへ行つた。辛うじて、

大学へ進学できたことだけは知っている。絵里のように学びたいことがあるからではなく、四年間のモラトリアム期が欲しかっただけらしい。

真姫は酷薄な予感を覚えていた。夢を叶えるということはどれも等しく簡単なことではない。にこは夢半ばで疲れ果ててしまったのかもしれない。その結果が、大学進学なのではないか。きつとにこは心のどこかで、まだ叶えられるかもしれない、と思っっているかもしれない。

父の口癖が真姫の頭に蘇った。最大多数の最大幸福のため、真姫は医者になるべきだ。この言葉に続きがあると知ったのは、最近のことだった。全員が幸福になるのが理想である。そのために動くべきである。しかし、もし全員の幸福が難しいのであれば、最大多数の最大幸福を選ぶ。

最大多数から弾かれた子供達はどうなってしまうのだろうか。真姫はようやく口を開けた。

「絵里はやつぱり、院へ進学するの？」

「ええ」

「どうして？」

「私、教師になりたいのよ。子供の頃、誰でも夢を持っているじゃない？ そういう夢を叶えられるように学芸に秀でた子になってほしいの」

真姫は自分とにこ絵里の姿が重なり、感情的な声が出た。

「でも、それは、余計に悲しくなるだけじゃないかしら？ 才能や環境で、夢を諦め

ざるを得ない子が出てくるわ」

「そうね。だから、学にも秀でる必要があるし、先生つていうちゃんど道を示せる大人が必要なよ。一つしかない道を歩むなんて、疲れちゃうわ。……そうでしょう？」

「……そうね」

真姫はこれからの子供達が羨ましかった。戻れるのならば、真姫もまた幼いあの時に戻りたかった。戻り、まだ純粹に夢を追いかけられる時に生きたかった。父すらも黙らせるほど芸に秀でた女の子でありたかった。

しかし、いくら過去に戻りたいと願ったところで、戻れない。過ぎ去った季節は永遠に戻ってこない。父との日々は、真姫が医者になった瞬間のみ、色鮮やかな幸福となつて蘇るのだろう。ならば、真姫は、そのために自らすら幸福の犠牲にしてしまう気なのだろうか。父との幸福な日々が、本当に真姫の幸福なのであるか。

真姫はあの時から絶えず、こういう思いに痛めつけられる。真姫の幸福は真姫だけものではないと気付いたのは、一体いつからだろうか。一人の幸福というもののために、何人も人間が支え、考え、生きているとすら思える。

真姫は後者である。絵里にもこも後者でありながら、前者でもある。自らの幸福のために、他人を幸福にもできる。何と羨ましい人間だろうか。

真姫は疲れたように絵里を見た。絵里は微笑を浮かべて、こう言った。

「どうしたの？」

「何でもないわ……。ただ少し、私の幸せって何なのかなあって思っただけよ」

「そんなの生きてなきや分からないわ。死ぬ間際、どれよりも色鮮やかな日々が、幸せだと思わうわ。永遠に動く時すら止めたい、そんな瞬間が最も美しく、幸せなのよ」

「大人ね。私はそんなふうに割り切れられないわ」
思い返しても、溢れてくるのは幼少期の記憶であつた。何も知らず、音楽に打ち込めたあの輝かしい日々であつた。が、その時不意に、にこの涙がその他の思い出よりもはつきりとした濃淡と共に蘇つた。

四

桜が散る中、真姫はにこに引つ張られる形で音楽室まで連れて来られた。全然状況が分からない真姫に、にこは鍵盤を叩きながら言う。

「ねえ、弾いてよ」

「え、は、何を？」

「何でもいいわ。何か一曲、弾いてよ」

黒い丸筒を持つにこの泣きそうな微笑を見て、もう会えないのではないかと直感で分かつた。弾ける曲は沢山ある。真姫はその中で、真姫もにこも知っている曲を弾き、歌うことにした。とびつきり優しい声で。

——愛してるばんざーい！　ここで良かった。

私達の今がここにある。

愛してるばんざーい！　始まったばかり、明日もよろしくね——

にこは何も言わず、最後まで聴いていた。真姫も震える手で包むように優しく、囁くように優しくけれども力強く歌う。外の賑やかさも何もかも時間が止まったように存在せず、ただ、ピアノの旋律と歌声だけが全てであった。

たった一人のために歌う。それが真姫を猛烈に高めさせる。昔の演奏会とは全然違う昂りを感じていた。終わらないでほしいと思つた六分間の演奏。まるで、この演奏が終れば、にこと二度と会えなくなってしまうような不安だった。

にこはここ数ヶ月、ずっとその思いに駆られていたのだろう。だから、真姫に一層近付き、真姫が笑顔になれるように、微笑み、喋り、動いた。あの時の不思議な心のざわつきは、この別れを予期していた。

そんなにこを思うと、真姫は涙が零れてしまいそうになった。歌声が驚くまでに細くなり、震えた。鍵盤の上でしなやかに動く手が急に重くなった。真姫はそれでも最後まで歌い、弾いた。

にこは優しく笑い、言つた。

「ありがとう。ねえ、真姫ちゃん、そんな顔しないで。また会えるじゃない」
真姫は沈んだ声で訊いた。

「いつよ」

「ずっと先かもしれないわね。ずっとずっと、前にも言ったじゃない。あたし達が本当の意味で大人になった時よ」

「大人になるってどういうこと？」

「時間が経てば、分かるわ。ねえ、真姫ちゃん、また会いましょう。会えるからね。大丈夫だから」

にこの姿がどんどんと遠ざかっていくように思えて、真姫は思わず叫んだ。

「そんな確証のない約束、信じられないわ」

「本当なら、誰にだって、確証なんてないのよ。自分の将来すら、本当なら決まっていけないの。がむしやらに探して、泥まみれになって生きて、そうして初めて理解するの」

にこの温かみ溢れる声に、冷たいものを感じたのは真姫の人生が操り人形のようなものだからだろうか。真姫は、にことは分かり合えない溝のようなものを感じていた。

「また会いましょう、真姫ちゃん」

一条の涙を残して、にこは音楽室から出て行った。真姫は慌てて、にこの背中を追いかける。が、にこの姿はどこにもなかった。

「待って！」

返事はなかった。

真姫はある地方新聞の端っこの記事に、懐かしい名前を見た。父と会う時間までまでもう少しある。真姫は変わっていないことを祈り、電話をかけた。呼び出し音が一つ、また一つと増える度に、変わるのは当然であろう、という諦めのような淋しさが込み上がってくる。真姫が電話を切ろうとした時、真姫のものとは違う、不審そうな声が返ってきた。

『……はい？』

「え、あ、え、つと、真姫よ」

『……知っているわよ。どうしたの？』

電話口のはこは平静を装っているようだが、平静な調子の所々に驚きが波打っていた。真姫は思わず微笑しながら応じた。

「別に、用なんて特ににはないわよ。久し振り。元気にしていて？」

『元氣よ。ちよつと頭が痛いけどね。あんたはどうなのよ？ 無事にお医者様にはなれたの？』

「ええ」

真姫は短く、当然のように言い切った。研修医ではなくなったが、脳外科になるた

めに四年の専門的な研修を受けている最中である。

それでも、問診はするし、薬も出すし、救急時ならば受け入れなければならぬ。世間一般で考えれば、十二分に医師なのだ。真姫は遅れてきた満足感に、ようやく頬を綻ばせた。

「にこちゃんもおめでとう。新聞で見たわよ」

『あら、あたしも遂にスーパースーパーアイドルになっちゃったのかしら？』

「小麦粉を被るアイドルってどうなの？」

『仕方ないじゃない！ そういう流れだったんだから』

にこは困ったように叫んだ。真姫は何だかさういうやり取りが、まるであの時のように思えて、嬉しかった。

『でも、皆、笑顔になってくれたから良かったわ』

「怪我は？」

『あのね、真姫ちゃん、そういうことで怪我があつた方が逆に事件よ』

「それもそうね」

『まあ、あたしほどのアイドルなら、そんな怪我でも笑顔に変えられるわ』

真姫はこの大層な自信が可笑しくなった。にこは恥ずかしそうに何か言い訳のようなことを言っていたが、最後は二人して笑った。

真姫もにこも高校生の時のように他愛のない話で盛り上がった。もう二人の間には重苦しい将来に対する不安がなかった。

時はあつという間に過ぎ、父と会う時間が近付き、真姫は別れを惜しむように言った。

「それじゃ、にこちゃん、また会いましょう」

『ええ、またね。真姫ちゃん、最後に一つ訊いてもいい？』

「……どうしたの？」

真姫は唐突に消えたあの日のことを思い出し、自然と硬い調子になった。

『お医者様になれて、良かった？』

「ええ」

『そう、安心したわ』

真姫は歯切れが悪そうに答えた。そうして電話は切れた。真姫の気は晴れなかった。医者になれて良かったのだろうか。父は、医学部に合格しても、医者になれたとしても、研修が終つても、まるでそうなることが当然であるかのように、そうか、としか言わなかった。

その父から、書齋に来るように言われた。真姫は気を引き締めて、書齋に入った。書齋デスクに控える父は少し老け、ほっそりと衰えているように見えた。それでも表情は癖のように険しい。父の背にある本棚には医学書の隙間に、ソクラテスに始まり、アリストテレス、エピクロス、パスカル、アラン、ラッセル、マズローなどがあった。

父は真姫を見て、落ち着きのある調子でこう言った。

「まあ、楽にしたらいい」

真姫は父の正面に座り、父に尋ねた。

「それで、話して？」

「順調か？」

「ええ、まあ、順調よ」

「そうか。患者を受け持ったことは？」

「あるわ」

「何回？」

「数えきれないわよ」

父はデスクから、一枚の書類を見せた。読んでいくと、その書類が二十八歳女性のカルテだということが分かった。

『数年前から頭痛や肩の痛みが続き、数日前から後頭部や肩にも痛みが広がり、近くの前医受診。後頭神経痛と判断される。経過観察も、特変なし。現在、内服薬なし』

「一脳外科として、どう考える？」

「前医の設備不足が問題ありね。おそらく、こつちに来て、まずはCT検査つてところかしら。日時は？」

真姫は何故、一患者の情報が父の手元に渡っているのか気になった。父は病院を経営する側である。そういう父の元に一患者の情報が届くとは考えにくい。医局長から父の所に入ったと考えるのが妥当だろう。それでも当然ながら、疑問は残る。

嫌な可能性が一つだけあった。このカルテで気になるところは、この女性の後頭神経痛が完治しているのか、というところもある。数年前から続いているのであれば、再発したところで、いつもの頭痛が始まったと思うだけであろう。

真姫は父を見て、厳しい調子で訊いた。

「誤診？」

父は困ったように溜め息を吐き、低い声で答えた。

「この段階では、まだ誤ったとは判断しにくい。それでも一つ問題点を挙げるとすれば、前医の設備不足だろう。それは彼も把握している。彼から、私に直接、CT検査の依頼がきた。」

この依頼、受けてもよいか？」

こういう話は、真姫ではなくもつと上の人間同士で行われることではないか。わざわざ真姫を呼び出して、話す内容だとは思えない。この患者は父とどういう関係なのだろうか。一体何者なのだろうか。

真姫は率直な疑問をぶつけた。

「どうして、そんなことを私に話すの？」

二人の間に粟立つような沈黙が降りてきた。真姫がすぐに疑問をぶつけないければなかったと思つた時には遅く、父が重たそうに低い声で答えた。

「矢澤にこ。お前の知り合いだからだ」

真姫は何も言えず、自分の顔から血の気が引いて行く音だけが部屋に響いた。

父は顔色一つ変えず、真姫に確認を取る。

「それで、この件はどのように答えてほしい？」

真姫は未だ、何とも言えなかった。まさかこのような時に、にこの名前が出てくると思っただけでなかったことは勿論のことだが、にこが何か病を患っていること、にこを真姫が診なければならぬことなどが、真姫から言葉を奪った。

にこの頭痛は、本人の中では慢性的な、ストレスが原因の片頭痛と処理されていることだろう。最初はあまりに長期間続いたため、病院へ行った。そして治まった。次に症状が出てきたところで、にこはそういう職業に身を置いているため、気にしないことだろう。

これからにこ連絡を取り、CT検査を行わなければならない。が、真姫から言うるだろうか。

真姫の頭にはこの段階で既に、くも膜下出血、脳腫瘍、中耳炎、副鼻腔炎といったものが連想されていた。もしも膜下出血となれば、入院から手術まで視野に入れなければならない。

そういう医者らしいことを考える一方で、父に対する無遠慮な発言を腹立たしく思った。飛び出た言葉は激昂しているように熱かった。

「パパはもう少し考えて言えないの？ 起きていることをそのまま喋って、私の心情はどうでもいいの？」

父は涼しい顔で答えた。

「医者が患者に情を移すのがおかしいんだ」

真姫は逆上に身を任せ、叫んだ。

「何よ、それ！ 私達は、医者である前に、人間なのよ、患者さんも人間なの！ 情が移らないわけじゃないじゃない！」

父は溜め息をつき、独り言のように呟いた。

「人間、か……。互いが人間であるのに拘らず、何故、医者だけが機械の如く働かなければならないのだろうか」

西木野総合病院は、『二四時間、三六五日』の受け入れ体制が整っている。それは父が打ち出したことではなく、父より前の代から、打ち出され、整えられたものである。患者にとつて、救急にとつて、良い体制である。しかし、その代償は、数不足の医者酷使である。

それも脳外科医や心臓外科ともなれば、いつ何時呼び出されるか分からない。休みの日でも午後には病院で勤務をしていたなど一度や二度ではない。加えて手術となれば、リスクも他の科と比べると一段と高い。真新しい医者が、脳外科や心臓外科に少

ない理由はそういう体制も少なからず関わっている。

父の言葉に、真姫は何も言葉を返せなかった。そういう世界は、真姫が入ってよいところではない。もし真姫がその領域に踏み込めば、患者や医者や銭のように見えてしまうだろう。自分の家族すら、そのように見えてしまう。真姫はそんな人間になるために、この世界に踏み込んだのではない。

「私の仕事は、患者さんを診ることよ。お金の計算じゃないわ」

「ならば、この患者を受け入れるか？」

「もしそれがパパなりの優しさっていうなら、そんな優しさはいらないわ。医者が患者を選んでどうするの」

「ただでさ激務な脳外科だ。選べて損なことはない」

父は眉一つ動かさず、淡々と応じる。割り切っているようで割り切っていない姿勢に、真姫はどこか不都合のような、居心地の悪さを感じていた。

「もし私がここで選ばなかったら、どうなるの？」

「他の患者と同様にこの患者も扱われるだけだ。私の所に届いているため、事は少し早くなるがな」

思っていた通りの答えに、真姫は溜め息をつきそうになった。

父がここで欲しいのは、前医との良い関係である。患者を受け入れることは決まっている。この患者を、真姫が担当するか他の医者が担当するか。けれども、真姫の知り合いであるため耳に入れた方が良さだろう、と思っている行動だと考えられる。

にこの脳に異変があつた場合、真姫が全てを診る。真姫の技術は他の医師と比べると拙い部分がある。だからといって、にこを他の医師に頼れるだろうか。

たとえ腕が確かであつたとしても、絶対に失敗しないとはいえない。脳という器官を扱う以上、何かしら起きることが有り得る。そうなれば、きつと、真姫はその医師を責めてしまう。

たとえ真姫の手により、にこを死の淵に追いやってしまったとしても、真姫が責めるのは自分自身だけである。ある哲学者の言葉が嫌な思い出と共に蘇ってきた。

まだ、CT検査を行う段階である。そこまで重く考える必要はないのが辛うじて最大に、真姫を救い上げた。真姫は、父の暗い目を見て、はつきりとした調子で答えた。

「私は誰であろうと診るわ。選ばないし、選べるとは思えないわ」
「そうか」

こんなことを思う心のどこかで、真姫は始めて、父の利欲に汚れた優しきを見せられたような気がした。父は真姫の微笑を見て、始めて不快そうに眉を寄せた。

「お前は、友人の頭にメスを入れられるか？」

「パパは、矢澤さんがどういう人か知っている？」

「誰だ？」

「アイドルよ。皆を笑顔にできるとびつぎりのアイドルなのよ。そういう女の子の憧れの肌を傷つけるようなことはしたくないわ」

「検査だけで終わらせる気か？」

父は薄情者と言いたげに嘲笑を零した。真姫は気にせず、続けた。

「もし本当にメスを入れなければならぬ状況になれば、切るわ。あの子の頭を」

父は真姫の答えを聞くと険しい顔を崩し、穏やかそうな顔でこう言った。

「お前がそんなことを言うとは思わなかった。本当ならば、このことは、A先生に担当してもらおうつもりだった」

A先生とは、脳外科のエキスである。A先生の技術の高さは、真姫の目から見ても惚れ惚れする。患者への負担が少ない術式を瞬時に判断できる頭と腕を持ち合わせている。が、一人の人間として考えると、あまりに独裁過ぎ、真姫は時々ついていけないことがある。

「が、お前が切ると言えるのならば、切ってもらわなければならない。お前には沢山切ってもらわなければならない」

外科医が手術の腕前を上げる効率的な方法は、沢山メスを握るしかない。真姫はできることならば、メスを握りたくはなかった。自身の腕と死を天秤に掛けているような気がして、全然生きていく気がしない。手が震えてしまい、有り得ないミスを想定しまう。

今もできることならば、にこの頭にメスを入れたくはない。それでも、にこを診ようと決意できたのは、にこが真姫にとつて大切な友人だからである。

にこから感じたあの不安が、今不思議と真姫の手にメスを握らせていた。手術が成功した時、その不安が全て消え去るように思えたからである。そうして、ずっと答え

てほしかった、にこ自身の幸せについても教えてくれるような気がした。

真姫の目は自然と父の背中にある本を追いかけていた。そうして思い出したかのように、心の奥底が熱を帯びてきた。

「パパ、覚えている？ 皆が幸福になるべきである。だけど、皆が皆幸せになるのは難しいことだろう。そうなった時、最大多数の最大幸福を選ぶべきだ」

「ああ、よく覚えている。それが？」

真姫はようやく、父にずつと言いたかったことを打ち明けた。

「ねえ、私の幸福はどこにあるの？」

父は驚いたように目を見開いた。真姫は堰を切ったように父に訴える。

「ねえ、パパ、私、医者になったよ？ ちゃんと、守ったじゃない。でも、どうしてもして、これっぽちも嬉しくないの？」

ピアノもアイドルも写真も星も全部捨てて、パパ達の言いつけ通り、医者になったじゃない。それなのに……！」

父は当惑したように、真姫を見守るだけだった。ピアノは家からなくなり、アイドルも一年で辞め、写真も望遠鏡も捨てた。医者になることで幸福が訪れるために。

けれども、一向に心が満たされない。むしろ心にぽっかりと穴が空いたようである。その穴を考えないように働いていたところで、心は一層、貪欲なまでに求めるようになっていた。退院する患者を見送る度に、何故自分だけがこうも満たされないのだろうかと思った。

しばらくの沈黙があり、父は苦しそうに口を開けた。

「新しい医者が一人でも必要だった。お前も、現場で働き、分かっただろう？ 大人になれ、真姫。この世に、幸福を享受できる人間がいれば、享受できない人間がいるんだ」

真姫は何も言わず、書齋を飛び出した。一滴の涙が床に落ちた。

七

頬にぶつかつた澄んだ風は全然冷たかつたが、真姫の昂つた気持ちを抑えることはなかつた。嘘のように満ちる星々は、嘲るように輝いていた。深まる夜気のように、真姫の心も暗くなつていくように思えた。

が、真姫の身体を火照らしているのは、幸福になれない絶望よりも、何故幸福になれると思つて医者の道を志してしまつたのだろうかという過去の自分への激しい後悔であつた。

自分の将来が全て分かっているようで全然分かつていなかつた青い自分は、どうして音楽も自然も捨ててしまつたのだろうか。夢を叶えれば必ず幸福になれると思つていた甘い自分は、どうしてそんなことを信じてしまつたのだろうか。

どれほど後悔に苛まれたところで、真姫の幸福は霧の中にある。しかし、その幸福は果たして本当に幸福なのであろうか。

やはり、真姫が自信を持つて幸福だと言えるのは、過去なのである。医者になれと命じられながらも、音楽と星を楽しめたあの時なのである。

「……真姫ちゃん？」

真姫は、彼女の潤んだ瞳を見た時、誰だか分からなかった。厚い化粧の頬に浮かぶ微笑の底に、子供のように柔らかい笑みが流れているように見えた。随分と大人びた声は、強い驚きが現れていたがどこか暖かった。黒髪は二つに結われておらず、夜闇に深々と溶け込んでいた。

二人の間に降つてきた沈黙は至極だった。数年振りの再会も大きいのが、互いに互いの現状が分からなかった。

何故、西木野真姫がここに居るのか。何故、矢澤にここ居るのか。二人は二人して、そんなことを考えているように、押し黙っていた。それでも疑問の多いにこの方が口を開けるのは早かった。

「またそんな顔をして、どうしたのよ？」

「何でもないわよ」

真姫は恥ずかしくなつて、理性的に答えた。けれども、口の端に浮かぶ震えばかりはどうにもならなかった。嬉しくもあり悲しくもあつた再会は、すぐに真姫を一人の

医者に立ち戻らせた。

真姫はいきなり本題に移る気にはなれなかった。何の準備もなく説明をしたところで、にこの混乱を招くだけである。今は普通に再会を楽しみながら、にこの現状を確かめればいい。そうして、にこの方から検査を受けに来させるようにしたい。

「仕事は？」

「休みよ。にこちゃんは？」

「久し振りの休みよ」

「体調は大丈夫？」

にこは溜め息を零し、呆れたように言った。

「良い歳をした大人が体調一つも管理できないなんて駄目過ぎでしょ」

「それでも、気付かない間に、というのはいわ」

「どうせストレスよストレス」

「そんなこと言っていると、いつか倒れるわよ」

「そうなたら、真姫ちゃん助けてね？」

にこは静かに微笑して、甘えるように問うた。真姫はその声が、まるであの春の時のように思えて、すぐさま真剣な声を上げた。

「じゃ、明日、受診に来て」

「仕事なんだけど」

何故、明日なのか、にこは訊かなかった。もしかすれば、にこ自身、既に自分の体

調の変化に気が付いているのかもしれない。関係者に悟られないように、ストレスと強がっているだけかもしれない。

真姫はもう、自分の知っていることを、にこに打ち明けたかった。知っているのに拘らず、何もできない自分が嫌になつてしまう。けれども、打ち明けられたにこのことを考えると言い出せなかった。

「終つてからでも、始まる前でもいいから、来て」

真姫は、にこだけは笑顔であつてほしかった。アイドルだからという理由だけではなく、にこはアイドルになりたくてなつた。不幸にさせてはいけない。もし、不幸にさせてしまえば、真姫は一生後悔する。真姫は、まるでにこの幸福や不幸が自分自身のものであるように思えた。

何故、にこの時だけはこんなことを思つてしまうのだろう。互いのことを知つていることもある。が、そういうところだけではなく、どこか深い部分で似ているところがあるような気がした。そこに惹かれ、こんなことを考えている。

真姫が高校生だつた時には気付いていなかったことであり、もしかすればにこは既に気付いていたことかもしれない。真姫もにこのように大人になつたのだろうか。

真姫の胸の底から、さつきとは全然違う熱さが広がつたのはその時であった。真姫は堪らずにこの手を取り、どんと先を歩いた。にこの手も寒空に晒され冷たかつた。

にこは何も言わなかつた。見透かされているように思えて、余計と熱くなつた。に

この楽しいげな声が、夜を揺すった。にこの楽しいげな声に、真姫の頬は自然と緩くなった。

八

翌朝、西木野総合病院へにこが来た。撮り終えたCT、MRAの説明に入った時、日はもう高い所に上っていた。

「矢澤さん、貴女の脳の血管、ここですね、ちよつとこぶになっているのが分かりますか？」

「分かるけど、一体何なの？」

「血管が膨らんで、弱くなっているんです」

「弱くなっている？」

「はい。……薄くなっているとも言えます。このこぶが破裂しますと、くも膜下出血というものが引き起こされます」

にこの目に動揺が走った。にこですら、聞いたことがある病名なのだ。脳底動脈先端にある破裂していない八ミリの瘤を見て、選択を一つ増やさなければならなかった。

「……真姫ちゃん、本当なの？」

「不安を煽るようなことしか言えなくて、ごめんなさい」

「謝らないでよ、治るの？」

「幸い、まだ未破裂だから大丈夫。だから選択として、経過観察、血管内治療、開頭クリッピングの三つがあるわ」

「経過観察って、つまり、何もしないってことよね？ 真姫ちゃん、何もしなくて平気なの？ 最悪の可能性もあるんでしょ？」

「ええ、今は、ね。でも、破裂してからじゃ遅いわ。」

「にこちゃん、もう一つ聞いてほしいことがあるの。血管内治療って言ったわね？ 血管からコイルっていう物を通して、こぶに埋め込む。ただこれも難しいのよ」

「どういふこと？」

「にこちゃん、このこぶの根本を見てもらっていい？ この根本から出ている血管、これは別の血管。このこぶをコイルで塞ぐことによつて、今は大丈夫でもこの血管を詰まらせてしまう危険性が高いわ」

「実質、選択は一つしかないようなものであった。頭を開き、動脈瘤と親動脈との間をクリップで留める。未破裂脳動脈瘤といえど、頭を開き、頭蓋骨に穴を開け、脳内を手術する。それほど難しくない手術であれ、一つでも失敗を犯せば、重い後遺症が残る可能性がないと断言はできない。」

「今、にこに、脳内血管にこぶができており放っておくと大きな病気を引き起こすと説明したところで、自覚症状はない。わざわざ手術する程度のものではないと考えて

もおかしくない。

クリッピングの説明を終え、には自分の意見を述べた。

「ねえ、真姫ちゃん、別にあたしは大丈夫よ？ そんなに急ぐことでもないでしょう？」

「にこちゃん、今は、よ」

「でしょ？」

「でもね、にこちゃん、にこちゃんもつとアイドルとして売れてきた時、そういう良い時に、瘤が破裂する可能性はあるのよ。だから今の間に手を打ちたいわ」

「それでも、よ」

平静に言うにこに、真姫は段々と感情的になりそうな自分を見出していった。何故、にはここまで頑なに拒むのであろうか。にこの手術をしたくないという気持ちがあるからないわけではない。

「真姫ちゃん、あたしが今、これからのことで休めば、あたしを待っている今の人はどうなるのかしら？」

「無理をしちゃ駄目よ。そうやって無理をして、叶えたいことを叶えたところで……」

「……何よ？」

「また新しい叶えたいことが出てきて、延々と叶えたいことが出てきて、夢半ばで朽ちるのよ」

には真姫を睨み、叫ぶように言った。錯乱したように煌めく瞳の中に、全然落ち

着いている真姫が映っていた。

「それでもあたしは、アイドルなのよ！ 皆を笑顔にさせる、アイドルなのよ！」

にこの自分のことは二の次と考える悲しいまでの叫びが、真姫の胸を揺さぶらなかつたわけではなかつた。それよりも真姫の心を揺さぶつたのは、まるで自分を見ているようで悲しくなつた。

「それじゃ、にこちゃんはどうなるのよ？」

「あたしなんてどうでもいいじゃない。あたしよりも、あたしなんかよりも、もつと大事な人がいるのよ」

真姫は反射的に力の限り言つた。

「駄目！」

にこは肩を揺らし、呆然と真姫を見上げた。真姫はにこなど見れず、ただ己を戒めるかのように言う。

「どうして！ 人のために頑張つたところで、自分が幸せになれなかつたら虚しいだけじゃない！ にこちゃんはまだ、何も知らないのよ。自分を大事にできない人間が、幸せになれるわけじゃないじゃない」

「真姫ちゃん……」

「ねえ、にこちゃん、私の幸せはどこに行つたの？ どうしてこれほどまでに、満たされないのかしら？ 私の幸福はどこに行つたの？ 助けてよ、にこちゃん」

真姫はこの目を憚らず、涙した。何故、にこまで真姫のようになってしまったの

だろうか。真姫のようになってほしくなかった。にこはもつと純粹に、自他を笑顔にできる女だと思っていた。だから、アイドルになれると信じていた。

にこはただ一言、真姫に伝えた。その瞳はすつと落ち着きを取り戻していた。が、瞳にも頬にも一切の笑みはなかった。

「待ってて」

「……待てなくて、家に行ったらごめんね」

「いいよ、来ても」

九

にこは真姫と別れ、烈しい頭の痛みを覚えながら、どうしようもない怒りに苛まれていた。

にこはアイドルである。アイドルとは人を笑顔にさせるものである。職業としてのアイドルならば、客を満足させるだけで良いだろう。にこは骨の髄までアイドルである。久し振りに会った友人一人を笑顔にさせられずアイドルと名乗ってよいのだろうか。

他人を幸せにすることを、自分の幸せよりも上に置いている以上、にこが幸せにな

れる可能性は極めて低い。けれども決して、自分が幸福にならなくてもいいのではない。にこも可能ならば、他人の幸せが自分の幸せと直結されたい。

にこの幸福はアイドルとして活躍している瞬間である。そのにこを見に来る彼等も、その瞬間は幸福なのである。完成された幸福の循環器ではないか。それでもにこが幸せを味わえないのは、この頭痛にあった。

始めて烈しい頭痛を味わった時は、高校生の時であった。焦りや不安がもたらしたと思つた。それでも長い間続いたため、近くの病院へ行つた。薬に頼る生活をしばらく続けて、頭痛は消え去つた。それでも時々訪れるこの頭痛は、にこをはつきりと脅かせていた。

それでも受診に行かなかつたのは、大きな病の前兆であるような気配とこれまで自分が積み上げてきたものが崩されるような気がしたためである。

真姫の言っていることは正しい。しかし、そういう確証が得られているわけではない。にこはもつと、今を幸せにしたかつた。いずれ訪れる大きな病のためよりも、そのために今を生きたかつた。

何もかもが将来に対する不安に責められながら、にこは不安を忘れる時があつた。アイドルとして活動している時、そういう不安が全身から追いやられ、不思議な喜びに満たされる。

にこは、真姫が熱心にピアノを引くのが本当の意味で分かつた。将来に對すること、不安や苦悩や焦燥が、まるで川に流される石のように碎かれる。心に残っている

のは、身体を急かされるものと激しいまでの火であった。ここはアイドルである。誰かを幸福にすることができる人間である。一つの決心が、にこの胸に宿った。

十

しばらくの月日が過ぎたある夜のことであった。ここが西木野総合病院へやって来た。外は先の冬を引きずっているらしく、ここはマフラーやコートを脱ぐ。

真姫の正面に座り、ここは言った。

「真姫ちゃん、手術を受けるわ」

真姫は暗い目をここに向けて、冷めた声を上げた。

「そう」

「その代わり、お願い聞いてくれない？」

「お願い？ 何よ？」

「真姫ちゃん、ピアノ弾いて」

「夜よ」

「じゃ、明日」

「どつちにしろ嫌よ。あの日から弾いてないんだから」

「こは穏やかな顔で、昔話を始めた。

「ねえ、真姫ちゃん、あたしに、幸せのことを訊いたこと覚えている？ 二人とも高校生で、真姫ちゃんが泣きそうな顔でピアノを弾いていたあの日」

あの日、真姫はピアノを弾きたかった。ただピアノを弾きたかったというよりも、これから待ち受けていることから逃げたかっただけだった。

「あの日ぐらいから、頭痛が続いていたのよ。それで自分で調べて、真姫ちゃんの口から、そういう話がでて、いよいよよくなって思ったわ」

真姫は弾かれたように、にこを見た。口の端から純粹な疑問が零れた。

「……どうして」

「怖かったの。だって、治しても、必ずしも膜下出血が起きないわけじゃないでしょ？」

「もつと自分を大事にしなさいよ！」

真姫の激昂を受けて、こは表情を崩さず言った。

「真姫ちゃんこそ、もつと、あたしより直接的な形で、他の人を助けるんだから、もつと大事にしなさいよ」

「私は、そんなこと無理よ」

幸福になれる人間がいる一方で、幸福になれない人間もいる。後者である真姫が、どのようにして自分を大事にすれば良いのだろうか。自分を大事にしたところで、一体どうなるのだろうか。そんなことを思うのならば、もつと患者のために生きたい。

にこは真面目な顔でこう言った。

「じゃ、真姫ちゃん、あたしを大事にしてよ」

「自分のことを大事にできないのよ、できるわけないじゃない」

「できるよ」

「どうしてそこまではずきり言えるのよ……」

「自分を犠牲にしてまで、他の人のために動いているんだよ？ できないわけないじゃない」

真姫は心が打たれたような感じがした。それでも、平静を装っていた。

「仕事だからよ」

「嘘よ。真姫ちゃんが、そんな上手な嘘をつけるわけないじゃない」

真姫は、にこが不思議で堪らなかった。病魔に侵されているのに拘らず、どうして健康な真姫の心配をしているのだろうか。

「にこちゃん優しいのね」

「別に優しいから、こんなことを言っているわけじゃないわ。ねえ真姫ちゃん、アイドルって何か分かる？」

真姫は呆れたような微笑をして、昔、にこに教わった言葉をそのまま返した。

「笑顔にさせるんですよ？ 何回聞いたと思ってるのよ」

「友達一人を笑顔にできないなんてアイドル失格なのよ。あんたはもつと、正直に生きなさいよ」

「にこちゃんのように生きられたら苦労しないわ」

「何のために、あたしがアイドルになったと思ってるのよ」

「夢だからでしょ？」

「あんたが笑顔にならなかつたら、アイドルになった意味がないわ。いつも小難しそうな顔をして、何でも知っているような目で全てを見て、でも、そんなあんたがピアノやダンスのことになつたら、笑うのよ。本当、嬉しそうに笑うの。嫉妬しちゃうわ」

「だからね、真姫ちゃん、あたしの手術が終わったら、一回だけ弾いてよ」

真姫は、にこの目の端に浮かぶものを見て、仕方なさそうに答えた。

「しょうがないわね、一回だけよ」

十一

ある穏やかな春の日のことであった。真姫達は、何十年か振りに音ノ木坂学院の音楽室のピアノの前に座っていた。ピアノの向こう側には、まるで昔の時のように、嬉

しそうに笑うにこの姿があつた。

にこが、学院に頼み込み、昼休みの間だけピアノを弾けるように取り計らつたのである。

真姫は鍵盤の上に指を置き、試しに一つ、音を鳴らす。軽い春風のような音だつた。この音は、にこにも真姫にも似合わない。真姫はもつと柔らかい、優しい音色が欲しかった。

真姫の指は、真姫の頭を無視するかののように、次々と音を奏でた。音はやがて聞き覚えのある一つのフレーズに辿り着いた。

烈しい喜びが波打つ音楽は、真姫の心を驚かせ、輝かせた。もつと落ち着いた曲を弾きたかつた。けれども、指は勝手に鍵盤の上で嬉しそうに、息を吹き返したように踊つた。

真姫は自然と、にこにこんなことを提案していた。

「にこちゃん、何が聞きたい？」

「何でもいいわよ」

「もう、訊いているんだから答えなさいよ」

真姫は笑いながら、別の曲を弾く。にこも真姫も知っており、歌える曲であつた。二人は自然と詩を口ずさんでいた。昔のように高く、澄んだ声ではなかつた。少し低くなつたが、その分、良い深みが出ていた。

——愛してゐるばんざーい！　ここで良かった。

私達の今がここにある。

愛してゐるばんざーい！ 始まったばかり、明日もよろしくね——

真姫は、この穏やかな時を、にこと共有することによつて、ようやく幸福を見出した。人は一人では幸福になれないのである。

みんな
で叶える
物語

ある晩秋のことである。西木野真姫は練習の後、音楽室のピアノの椅子に腰掛けていた。何かを弾こうと鍵盤の上へ乗せた指は全く動く気配がなかった。練習の後に呼び止めた園田海未は先ほどから何も言わず、傍らに立ち、ずっと待っている。しかし、いよいよ、

「どうするのです？」

と、口を開ける。

「どうって？」

「悩んでいるのでしょうか？」

「それは悩むわよ」

真姫は疲れたように頭を垂れると、狂った低い調子が響いた。真姫がこうして悩んでいるのは、ラブライブの最終予選を来月に控えた今、新たに曲を作ろうと意気込んでいたのだが、全くといっていいほど新しい曲想が湧いてこないからである。

作曲を引き受けたのはいいが、何故、真姫だけここまで悩まなければならぬのだろうか。やはり、作曲など引き受けず、自分の好きな曲を弾いていた方が良かったのかもしれないが、今更そんなことを思ったところで、何一つ変わらない。

苛立ったような険しい目を海未に向ける。

「ねえ、何かない？」

「新曲ですか？」

「ええ」

「前の曲でも良くありませんか？」

「駄目よ」

「何故？」

「新しい曲の方が皆、やる気になるじゃない」

言い切った真姫に、海未は遠慮がちに確認を取る。

「ですが、作れないのでしょうか？」

「……難しいわね。だから、詩から何か得たいのよ」

「得たいのよ、と言われましても……」

二人は溜息をついた。真姫は心に蔓延ろうとする不安を払うかのように闇雲に音を奏でると、昔弾いた曲が音楽室に広がる。

穂乃果と出会う前、スクールアイドルとして彼女等と関わる前に、音楽室で弾いていた一節だった。

テレビでアイドルが歌っているのを聞いたわけでも、父親や母親のラックにあったのを聴き漁っていた時に見つけた曲でもない。真姫が気に入った音色を繋げて、繋げて作った初めての曲である。

この旋律を弾くと、煩わしい感覚が全身から抜け落ち、ピアノと自分しか世界に存在しないような不思議な高揚が全身に漲る。そして、純粹に音楽に打ち込めたあの時の記憶が悲しいままでに鮮やかに蘇ってくる。

何故、父親は、あの時、真姫にピアノと天体望遠鏡を与えたのだろうか。どれも中途半端に終り、医者になる決意をさせるためだったのだろうか。

そんな嫌な考えを振り払うかのように、真姫の指は鍵盤の上で激しく踊る。傍らに立つ海未の顔色に一瞬、青いものが走つたのを見て、真姫は思い出したかのように指を止めた。

音楽室には、落ち着きのない静寂が戻ってきた。少しの後、海未は不安そうに問う。

「それを新曲に？」

「これは違うわ……これは、皆が踊れるような曲じゃないのよ。……魔法の曲。私が元氣になれる曲よ」

「そうですね、安心しました。そんな曲にあう詩、書けませんから。新曲は、どんな曲になる予定なのですか？」

「さあ？　どんな曲になるのかしら。分からないわ
と、真姫は微笑した。

日は低い所まで落ちてきており、窓の向こうはいつしか黄昏に染め抜かれている。真姫は淋しそうに窓の向こうを見て、

「付き合わせて悪かったわね」

と海未へ言い、音楽室を出る。

真姫は胸底から溢れてくる焦燥感を何とかして鎮めたかったが、真姫一人ではどうにもならない問題だった。新曲を作るまで時間がないのは勿論のこと、新曲を作れたところで、皆が満足する形で提供できる自信がない。

この曲に時間をかければかけるほど、どんどんと真姫の思い描く曲の理想が崩れていくような感触が広がる。

それもこれも、秋のせいである。来月の予選を終えれば、本選となり、本選から春まで、時は嵐の如く過ぎ去ることだろう。となれば、三年生との別れは近い。

夏、別荘で矢澤にこと話したことが思い出される。

『きつと、あんたのアイドルは高校生活で終るわ。あんただけじゃない、花陽も凜も、穂乃果も……皆、高校で終る。だから、後悔しちや駄目よ』

『音楽がある限り、大丈夫よ……。にこちゃん、心配してくれてありがとう』

『忠告よ』

『それでも、ありがとう』

真姫がどれほど望んだところで、この九人で歌える最後の時が近付いている。

だからこそ、真姫は、悔いなく彼女達と一緒に歌い、踊れる曲を仕上げなければならぬ。

五月になれば、新入生が入部することだろう。そうなれば、また違うアイドルグループとなる。そうなれば、真姫はまた彼女達が悔いなく歌って踊れるような曲を考え

ることだろう。

真姫は知らず知らずのうちに、己でも驚くほどに九人に拘っていることに気付いた。その中でも、にこの将来に純粹な憧憬の視線を送っていることに気付いた。

彼女も孤独になつてしまつた一人である。しかし、にこはアイドルに憧れ、この道を歩むに至つた。好きが原動力になつている少女を拒むものなどあるはずがない。自分の好きと向き合い、叶えられたにこそ、真姫が羨ましく思わないわけがない。

どうして、真姫は己の好きなものを奪われなければならなかつたのだろうか。この三年で、好きを諦めなければならぬのか。

穂乃果達と触れ合うことで、自分が歌い、踊ること、音楽が一層好きになるのが分かつた。

ピアノだけではない。安いギターを買つて、時々、弾いてみることもある。ピアノとは全然違う音の感触が面白く、新鮮であり、胸に弾けんばかりの喜びが満ち満ちる。新しい曲を聞くと、自然と頭の中でピアノが鳴り響く。指が嬉しそうに動く。

そんな喜びを、三年しか知れないのは残酷以外の何物でもない。真姫は高校生活を終えれば、後は親の命令に従う機械の如く動くだけである。この定められた自由の間に、味わえるだけの幸せや喜びを味わいたい。

だからこそ、今、この九人でしかできない最高の曲を作りたい。しかし——と囁く悲観的な考えを黙らせようと、真姫は音楽室へ戻つた時、丁度、海未が音楽室の鍵を閉めようとしていたところだつた。

「忘れ物ですか？」

海未の深い色の瞳に見上げられ、心の奥底まで見透かされているような奇妙な感覚を覚えた。真姫は無言で首を横に振り、指先の熱を誤魔化すように、海未の手を取った。海未の手は全然熱を帯びていなかった。

「一緒に帰りましょう」

「……先に帰ったのは真姫でしょう？」

「良いじゃない、こうして戻ってきたんだから」

「それはそうですが……」

納得の行かない様子の海未の手を引き、真姫は帰路へと急いだ。

新しい曲はまだ出来そうにない。新しい曲を作ってしまったら、この九人で過ごせる時間が急速に縮まってしまうような恐怖が胸のどこかにある。だから、こうして悩んでいる方が良いのかもしれない。しかし、そんなことは八人が許さないだろう。

迫り来る冬の風が、手袋をしてない真姫と海未の手に厳しく吹きつけた。真姫は鼻先にじんわりとした痛みが走るのを覚え、身震いを一つ起こした。

二

懸念していた新しい曲は、九人で作り上げるといふ希の願いを叶えることにより一

難を去った。薄い灰色の雲が音ノ木坂を覆い始めた夕刻、真姫は希の家へ向かう。玄関に見慣れたブーツが置いてあり、邪魔をするならば帰ろうと思ったのだが、希と絵里の二人に快く迎えられ、絵里の隣へ腰を落ち着かせた。

真姫は温かい紅茶を飲み、口火を切った。

「ねえ、希と絵里はどうするの？」

「どうつて？」

「その、高校を……」

「私は進学するわ。やりたいことがあるのよ」

「やりたいことつて？」

「先生になりたいのよ」

「えりち、そんなこと考えてたん？」

「そうよ」

絵里は紅茶の水面を眺めながら、温かみ溢れる声でこう続ける。

「世の中には夢を叶えられない子だっているじゃない？ 才能の差とか家の都合とか……そういう子が腐らず、ちゃんと自分の目標や目的を持って、過ごせる。そんな所があつて良いと思うの」

「じゃ、うちはエリチのサポートやな」

間髪入れず言い切った笑顔の希に、真姫はすぐさま懐疑的視線を送る。希は小首を傾げるだけで、何とも答えなかつた。逆に、落ち着いた調子で尋ねられた。

「真姫ちゃんは？」

「医者しかないわ」

冷めた調子で言い切り、それ以上の追求を拒んだ。

一つ、また一つと時が刻まれる毎に、少しずつ何かが変わっていくのを真姫は肌で分かった。そして、これからがどうにかなるかなど、誰にも分からないことも——

そう考えると、真姫のように医者になり、総合病院に勤務が決まっているのは良いことなのだろう。しかし、医者になつてしまえば、大好きな音楽も星も写真も手放さなければならぬ。

西木野総合病院は、二四時間三六五日の受け入れ体制を整えている。真姫も九年後、そこで働いていることだろう。そのような過酷な体制の病院で働くとなれば、今と変わらない生活を送ることはできないことは、まだ学生の身分である真姫にも分かる。となれば、それまでの間に、自分に何が必要で、何が不必要なのか選んでおかなければならない。

そうしなければ、ここまで道を用意してくれた父親に、あれきほどまでに嫌いなはずの父親に、申しわけない気持ちがあつてしまつていく。

あれほど父親に反抗したい気持ちがあつたというのに、いざ現実を前にしてしまえば、こうも容易く折れてしまう己が情けなくなつた。

真姫は希の輝かしい瞳を一瞥して、不意に残っている三年生の将来を憂いた。

「ねえ、にこちゃんは どうする気なの？」

「……さあ、にこつちのことはうちらも分からんよ」

希の自信がなさそうな返答に対して、絵里の返答は不思議な自信に満ちていた。それが何だか無責任のように見えて、真姫は思わず鋭い目を投げた。

「にこは大丈夫よ」

「大丈夫って？」

「不器用だけど形にするじゃない」

「そうだけど……」

「心配なん？」

と、口元に微笑を色濃く浮かべ口を挟んできた希に、真姫は慌てて無愛想に言った。

「……別に心配じゃないわ」

「せやね。カードも告げてるし、安心やね」

「本当？」

「ほんまや」

希は星を描かれたカードを自信満々に真姫へ見せる。

真姫はそういう占いの類に全然詳しくなかった。むしろ、そういう類を信じてしまえば、叶えられなかった時、裏切られたと思うため、信じられなかった。

しかし、希の言うことはそういう思いを吹き飛ばす安心感がある。実績なのだろうか、彼女の言葉を頼れば、残された六人はどうなるのだろうか。スクールアイドルは続

ける気ではいるのは、真姫だけなのかもしれない。にこと同じ道を辿ってしまえば、穂乃果がスクールアイドルとして活躍している今、にこのように救われる道はないように見える。

一人でスクールアイドル活動を続けられるほど、真姫はこの活動に熱を見出している少女ではない。一人になってしまえば、真姫は大学受験に心血を注ぐ。

そう思う一方で、折角、穂乃果によって示された道を、真姫が閉ざしてしまうわけにはいかないという思いもあった。

スクールアイドルを続けたい思いはある。となれば、花陽や凜を巻き込んで三人で活動するか、穂乃果達と一緒に六人で活動すれば良いだろう。あるいはまた、新入部員を集うのも良いことなのかもしれない。

この九人が揃うのはあまり遅かった。もっと、もっと時間があれば、今よりもずっと良い時間になったに違いない。そんな後悔を、真姫は最終予選を終えた時から考えるようになっていた。

彼女達と同じ後悔を味わないように、自分の時間だけは、これからの高校生活だけは、後悔一つない濃密な時にしたいのだ。

真姫は二人の顔を見ながら、真面目な調子でこう訊いた。

「ねえ、絵里と希はこの三年間どうだった？」

「まだその答えを出すのは早いわ」

「うちは良かったよ」

意外そうな声を上げたのは、絵里だった。

「希？」

「最初の方は全然やっただけど、皆がこうして繋がって……うちは本当に良かった。奇跡みたいにならないうちに幸せやっただよ」

希の頬に浮かぶ純粹な幸福の色を見て、その言葉が嘘偽りのない本心から発せられたものであることは明らかだ。

真姫は羨望の眼差しを希に送り、無意識の間に、良いな、と呟いた。隣に座る絵里にだけ聞こえていたのか、テーブルの下で優しく手を握られた。真姫は驚いたが、拒むことなくその温もりを受け入れた。

後、二年間残っている。この二年間を、多いと考えるか少ないと考えるかは真姫にしか分からない。

それから年末について他愛のない話をして、二人は帰ろうと玄関を開けた頃、外は粉雪が舞っていた。希から一本の傘を借り、真姫と絵里は互いの身を守るかのように寄り添い、濃い闇が広がる帰り道を急ぐ。

その道中、真姫は小さな声で不安を打ち明けた。

「これから、どうなるの？」

思えば、真姫の進路に不安の二文字はなかった。小中は一貫校であり、高校進学は父親の一存で決められた。大学受験先は国立の医学部であり、就職先も西木野総合病院である。

父親の庇護の下育てられた真姫が、不安になることなどない。ただ、ゆえにだろうか、こうして不安に陥った時、どうすれば良いのか分からなかった。

どうすれば最良なのか考えたところで、雪のような案に、真姫の心を揺り動かされた。

「それは、私が簡単に言っていることではないのよ。真姫、自分で決めなさい。自分で、残りの時間全てを費やしても良いから……顔を上げて、この道で良かったって言えるようにね」

「そんなの無理よ」

真姫は絵里の刺のような言葉を、否定した。真姫は彼女達のように、数多あるものから選び取れるような頭脳も勇気もなかった。ただ、与えられたものを楽しむことしかできなかった。

しかし、絵里は微笑を浮かべて力強くこう言った。

「大丈夫よ。だって、真姫は曲、作れるじゃない」

「それとこれとは違うのよ」

「一緒よ。数ある音から最適なのを選んで、並べれば、ね？ 難しく考え過ぎなのよ」
絵里の言いたいことは分かる。しかし、最適な音を並べたところで、その音楽が駄作になることがあるのだ。

真姫は一曲を仕上げるのに、どれほどの時間、ピアノと白紙の五線譜と向き合っているかを絵里は知らない。音符を書いたわけでもないのに、五線譜の上で音符が踊り、

次々と埋め尽くされる五線譜を見ても、真姫を納得させる曲ではないことも多々ある。九人の期待を背負うのが大きな重圧となり、押し潰されそうになる。

実際、最終予選の曲が出来上がるまで、寝られない日が続いた。寝ても起きて、耳からピアノの音が離れない。練習中もずっと頭の片隅で、狂ったようにピアノの前に座っている自分を見ていた。

希と絵里がいなければ、新曲はなかったと断言できる。

そうして九人で一山を乗り越えたと思えば、また山である。しかも今度の山は、先ほどより峻烈だった。しかも、真姫一人で登らなければならない。真姫一人の手で登れると思えない。

頼みの絵里達は既に高い所から、悠々といった様子で手を差し伸べている。この手を取れば、真姫は自分の足で歩まなければならない。

真姫にそれほどの勇氣はなかった。この勇氣の欠落に気付いた真姫は、心の一部を蝕むとある感情を見付けた。

己が思っているよりも何十倍も、父親へ依存している。反抗といっても、家を出たり、知らない土地に飛んでいってしまうことは恐ろしくてできなかった。

父親の下を離れた己が存在していることを、一切想像できないからである。高校生活の間に起きた反抗は、反抗と呼べるものではない。

重大な問題に差し掛かった時、極自然に父親の姿を思い浮かべ、父親に否定されれば全てが間違いだと考えてしまう。

真姫のアイドル活動は、父親への依存を深めるだけのものではかないのだ。離れようと離れようとすればするほど、残酷なまでに近付いてしまうのである。

生まれて始めて手に入れたであろう自由な、親の目のない、画期的な日々だった。皆に囲まれてピアノを弾くのが楽しかった。穂乃果や凜や花陽に尊敬の目で、凄いだとかかつこいいだとか綺麗だとかそんなふう褒められると嬉しかった。

そんな真姫だけの輝かしき思い出が、急速に色を失い、幼かった頃、ピアノのコンサートで二位になった時の記憶が、胸に打ち込まれた楔が、涙を誘った。

真姫は込み上げて来る吐き気を絵里に悟られないように、走った。粉雪がコートやマフラーや髪に零れ落ちるが、構わず、走った。

「真姫！」

絵里の声など気にせず、震える足を無理に動かし、走った。

何故、真姫だけがここまで縛られているのだろうか。絵里や希のように普通の少女でいられたらどれほど幸せだろうか。素直にスクールアイドル活動を三年間楽しめ、今のよう悩むことはない。

何故、真姫だけがこのような運命に晒されているのだろうか。親の期待にしつかりと応えることを自覚するために、スクールアイドルになったわけではない。

何故、真姫は自らの幸福を手放さなければならぬのだろうか。医者になり働くことだけが、真姫にとって絶対的な幸福なのだろうか。

真姫は全力で否定したかった。しかし、否定したところで、別の幸福を見出だせな

い。音楽も写真も星も、医者と比較してしまい、純粹な目で見れなかった。

真姫の手から逃れた幸福は一体どこへ行くのだろうか。

この雪のように、誰かの幸福へとなるのだろうか。あるいは、川へ溶け落ち、幸福の泉となつてもっと大きな幸福の、最大多数の幸福へと流れ着くのだろうか。

幸福の所在など、真姫には分からなかった。それでも、ただ一つ分かることがある。真姫は幸福から滑り落とされた。

三

早春の夜空は、冬の澄んだ空と比べると幾分か落ち着いた色合いになっている。音ノ木坂学院の合格発表を控えた頃、真姫は自転車の前籠に三脚や双眼鏡の入った鞆を積み、後ろに小さな天体望遠鏡を括りつけ、河原へ向かった。

真姫の白いマフラーを揺らす風は、九人で居た時よりもずっと寂しかった。九人で見えたあの海、あの夏の帰り道、にこはたつた一人で早春のことを思い続けたのだろうか。卒業すれば、穂乃果達はとうするのだろうか、と。きつとにこだけではなく、絵里も希も絶えず考えながら、穂乃果達と過ごしていたのだろうか。

にこはこれからどうするのだろうか。にこの家庭は真姫の思っているより、もっと深刻なように思える。一人っ子の真姫と比べ、にこの下には妹と弟がいる。彼女等を

支えようとしたら、己の夢よりも優先せねばならないものがある。

となれば、にこもまた、真姫と同じように家のために夢を諦めなければならぬだろうか。しかし、にこがそういう選択をするとは到底思えなかつた。

真姫のエゴでしかないが、ここにはアイドルを続けてほしい。ことりは服飾の道へ、絵里は教壇に立つてほしい。凜や花陽はこれから自分のやりたいことを見付けて、叶えてほしい。

天体望遠鏡を覗くと、一際明るい白や藍白の星があつた。丁度、三角に結べ、三角の中をいくつもの星が連なっているのがよく見える。真姫はそんな輝く星々の隙間に、ひっそりと輝く一条の赤い星を見付けた。

真姫はその星に己の運命を見出したように、天体望遠鏡を覗くのをやめた。その時、歩道の方から

「真姫ちゃんだにや〜！」

と夜空を割く底抜けに明るい声が響いた。真姫は反射的に沈んだ目を向け、駆け寄つて来る練習着の星空凜に、真姫は何かを隠すように刺のある声をかけた。

「何よ……」

凜は耳当てに手袋にニット帽と冬支度をしていたが、頬は紅潮しており、言葉の節々から荒い息が漏れ出ていた。

「あ、望遠鏡！ 真姫ちゃん、真姫ちゃん！ あれは？」

どうしてだとか何故だとか、そういうことを訊かず、真つ先に望遠鏡を覗いたり、

肉眼で星を見る凜が愛らしく思え、口元に優しい笑みを浮かべ、呆れや嬉しさが混じった声で問うた。

「どれ？」

凜は真姫の隣に座り込み、鉄紺の夜空を指差した。

「あの、赤い星！ 凜、目が良いから見えたよ」

「あれ？」

と、真姫は凜と同じように座り、同じように夜空を見上げながら、訊いた。双眼鏡で覗いてみるが、凜の言っているような星は見えない。

「違うにや。もう、真姫ちゃんは望遠鏡に頼るからだーめ」

「仕方ないじゃない。見えないんだから」

「真姫ちゃんはもつと周りを見ないといけないと思うにや？」

「何それ？」

「凜もよく分らないにや」

「意味分かんない」

と真姫が苦笑を混じえて言った時、凜は真姫に覆い被さるように叫んだ。

「流れ星！」

真姫は凜の声に後押しされるように空を見上げたが、流れ星は見えなかった。

隣の凜を見ると必死に何かを願っているように、目を閉じ、両手を合わせている。真姫はそんな迷信を信じる凜が面白くなって、こう訊いた。

「何をお願いしたの？」

「言ったら叶わなくなるから秘密」

可憐に笑う凜に、真姫は自分の願いを口にするのを躊躇った。凜に、卒業のことをどのように考えているのだろうかと言ひ訊く気は起きなかった。

きつと、何も考えておらず、今この時を謳歌できればそれで良いと考えているのだろう。当たり前のように、絵里がいて、希がいて、にこがいて……そういう時間が永遠に続くと思っている。

三人が卒業すれば、凜や花陽がどうするのだろうか。偶像を追い求めるように、活動が続いてしまうのだろうか。花陽はきつと、そんなふうにはアイドルを続けてしまおうだろう。

花陽はアイドルが好きだった。にこと同じように。しかし、にこと花陽は同じようでありながら、夢のために生きられた少女と胸の内に留めていただけという最大の違いがある。

凜もまた、花陽のようにアイドルという存在に憧れを見ていた一人であろう。己と違うがゆえ、なりたかった一人である。

その憧憬は決して、花陽のように直接的なものではない。寧ろ、真姫がかつて、ピアノのコンクールで白いロングドレスを着た時の感情に近い。髪も高く結い上げ、ピアノの薔薇が付いたレースを付けたあの日。緊張を味わったが、あんな綺麗な衣装で着飾り、自分の大好きなピアノを弾けて、母親が優しく笑う。

ああいう日々を真姫が諦めざるを得なかったが、凧はこれから色々なことができるだろう。得意な陸上を続けるも良い、女の子らしいスタイルと高い運動神経を活かして本人の好きな職に就くこともできるだろう。

真姫にとつてしてみれば、凧も、なりたかった一人だった。

「ねえ、凧はどうするの？」

「にや？」

唐突のことに小首を傾げる凧に、真姫は何と伝えるか悩んだ一瞬、二人の僅かな隙間を縫うように冬を感じさせる風が通り抜けた。凧は僅かに両眉を寄せ、逃げるように歩道へ走った。

真姫は追いかけようとしたが動けず、傍らを去る凧を眺めることしかできなかった。防波堤まで登った凧は、真姫に背を向けたまま、空を見上げている。幾条もの星が流れるのを見ながら、寂しそうにこう言った。

「凧は賢くないから、そんなこと分らないにや〜」

「でも、凧が大人になったら、きつと、真姫ちゃんの言っていたことが分かるかな……?」

「……私、待っているから」

真姫はどう抗つても、音ノ木坂から離れることはないだろう。絵里も、希も、穂乃果も海未も、音ノ木坂で働くことだろう。

この街から巣立っていくであろう彼女達を、真姫は待ってしよう。いつか、再び、

九人で再会できる時を待っていよう。

真姫はそんなことを思いながら、ようやく重い腰を上げた。

「真姫ちゃんも帰るにやあ？」

「あんまり遅くなつちやうと怒れるからね」

真姫は自転車を押しながら、凜の歩調に合わせるようにゆつくりと歩く。この瞬間が終るのを拒むように、ゆつくりと。

「厳しい家なんだね」

「厳しくて嫌になるわ」

真姫は嫌なことがあると、こうして望遠鏡を抱えて、出掛けることが何度かあった。星を眺めていると、嫌なことが流れ、清々しい気持ちになる。数多の星が、落ち着いた空色が、沼底に引つ張られた真姫の心を引き戻してくれる。

ピアノは母親は、天体観測は父親が教えてくれた。勉強のこと以外で、将来のこと以外で、二人が饒舌になるのが嬉しく、そういうことを話す二人が輝いているように見えて、自然とその二つの面白さを知った。

特に、星の見方は、何日も帰つてこないことがある父親も同じ空を見て、同じ星を見ているのだらうと思えば、あの星の名前や、あの星座が学校で学ぶことよりも詳しくなっている自信があつた。

隣を歩く凜が、真面目な調子でこう言う。

「いつか、いつかだけだね、……そういう嫌なことがなくなればいいね」

「無理よ。そんなに甘くないわ」

「そうやって生きた方が楽しいと思うよ？」

「そうね。でも……」

「でも、でも、つて駄目だよ。真姫ちゃん」

潤んだ瞳を向けられ、真姫は喉までせり上がった言葉を何とか飲み込んだ。真姫は小さく、そうね、とだけ呟いた。すると、凜は忽ち笑顔になり、

「これからきつと楽しいことだらけにゃ！ みんなと一緒にラブライブで優勝するんだよ！」

と喜びを語られ、真姫は釣られたように笑顔を浮かべた。

きつと、ラブライブで優勝できる。真姫達はあのA-RISEと戦い、本選出場を勝ち取ったのだから。

ラブライブ優勝を引つ提げるスクールアイドルとなれば、注目度も求められるものを昨年とは格段と違ってくることだろう。となれば、衣装を作ることは勿論のこと、曲を用意する真姫と海未、そしてパフォーマンスをするメンバーに生じるものは今年のものとは一風違ったものとなる。

花陽や穂乃果はきつと慌て、焦ることだろう。ことりや海未は穂乃果のケアに、凜は花陽のケアに走る。となれば、来年入ってくるであろう新メンバーの焦燥や緊張を誰が取り除くのであろうか。真姫は自然と己がそういう役目に走っているのが浮かんだ。

絵里や希の卒業により、失うものは遥かに大きい。穂乃果や海未がカバーしてくれるだろうが、微妙に違ったものになる。

にこほどアイドルが好きで、アイドルになろうとした少女が出て行くのも大きい。しかし、花陽と凜がにこの思いを引き継いでくれることだろう。

花陽と凜は、スクールアイドル活動の中で、コンプレックスに打ち勝った。彼女達はアイドルというものがどういう存在なのかを、心で理解している。先代から続く愛情や熱意はすぐに新しく入ってくるメンバーに伝わる。

三年生が抜けることにより、部が変わることは避けられない。何事も変わらないこととはない。だからこそ、その時々を知っている人間が受け継いでいかなければならない。

そういう活動は、きつとにこからしてみれば、アイドルではないと言われるかもしれない。そのどに、人を笑顔にさせるような要素があるのだ、と言われるに違いはない。

アイドルという華やかな舞台上で生きられる者と比べれば、受け継ぐというものは全く華のない、地味なものに映るであろう。しかし、その役目も、人を魅了し得る存在になる。

真姫は音楽の内に、その美を見出していた。数多のアレンジャーが音楽の世界にいるように、過去の曲を奏でることによって、もたらされる感覚がある。曲を作ることが苦になる時があっても、ピアノと向き合う日がない日がない。

「ねえ——」

と、凜に声をかけた時、真姫は夜空を駆ける一条の星を見付け、真姫は己の運命を願った。不思議がる凜に、真姫は心地良い微笑を送った。

「凜と一緒にだと流れ星がよく見えるわ」

「それ、希ちゃんにも言われた！ 凜は皆の幸福の招き猫なんだよ」

と、満面の笑みを浮かべる凜に、真姫は虚を衝かれたように驚いた。凜も真姫も、三年生の一部分もすっかりと受け継ごうとしている。

彼女達と同じ時を過ごせるのも二ヶ月もない。彼女達のために作れる曲は、残すところ、一曲か二曲であろう。己のことは後回しにしても、今、この瞬間を幸せにしたかった。

何年かした後に振り返るときつと不幸に見えるかもしれない。それでも、真姫はこの九人でできることを最後まで貫きたい。

幸福か幸福ではないか、という問いは永遠に問われることだろう。大学受験の時、大学入学の時、就職の時とその全てに、この問いは姿を見せるに違いない。

真姫はいつでも幸福になれる存在ではない。医者という社会的地位を獲得としたところで、幸福ではない。その先にどれほどの過酷が待ち受けているのか知っているのは勿論のこと、真姫個人が望んだものでもないからである。

だからこそ、今、この九人でいられる時を絶対に幸福であってほしいのだ。この時間だけは、いつ見返しても色鮮やかな瑞々しい時であるようにしたい。

いくら幸福を望んでも、最高の瞬間が訪れても、時が止まることはない。次の瞬間には、新しい出来事がやってくる。そうして繰り返し、幸福と不幸を代わる代わる味わいながら、生きていくしかない。

振り返った時、絶対的な幸福は存在していたと胸を張れる時があると思う。その時を、この九人で過ごした一年にも満たない数々の日々にしたいたのである。

真姫はそんなことを思いながら、頭の中に浮かんだ不意のメロディーに乗せて、海未の詩を口ずさんだ。

——奇跡それは今さ、ここなんだ。

みんなの想いが導いた場所なんだ。

だから本当に今を楽しんで——

四

「今度の曲なんだけど」

と、真姫は穂乃果と海未とことりと花陽と凜とを音楽室に集め、そう言って、ピアノを弾いた。歌詞はまだサビしかできていなかったが、構わず最初から最後まで弾いた。

聞き終えた穂乃果は、

「絵里ちゃん達、呼んでくる」

熱を帯びた調子で言い、海未は落ち着いた調子で真姫の本心に迫る。

「どうして私達だけに？」

「今から新しい曲を用意するのは無理。それに、新しい曲で踊るのもクオリティーを下げるだけ」

「でも、予選ではできたよ？」

「穂乃果、予選でできたからといって本選でもできるとは限りませんよ。それに、あの時は希と絵里が引つ張ってくれたお陰でしょう？」

「そういうものなの？」

「そうです。それに、ことりの衣装を作る時間も必要です。そうでしょ？」

「そうね」

曲は一曲用意すれば良い。しかし、衣装となれば九人分用意しなければならず、今から衣装のデザインを考えて、製作となれば、とてもだが間に合いそうにない。

衣装製作のためだけに時間を割ければいいのだが、ことりも歌い、踊る大切な一人である。

花陽に目を遣れば、不安そうに凜やことりを見ていた。振り付きが難しくなれば、凜と花陽の間でばらつきが生じる恐れもある。

そうとなれば、振り付きも簡単で衣装も簡単なものにしたら良いのだが、そうなるとライブでの優勝が難しくなる。どこに落とし所を設けるか分からなくなり、真

姫はいよいよ五人の前で新曲を弾いたのである。

三年生に声をかけなかったのは、彼女達の力に頼ってしまえば、いつまでも彼女達に頼ってしまうように思え、卒業後も彼女達を求め、縛られてしまうからであった。希と絵里はやりたいことをやりながら、この九人を最高の舞台に導いてくれた。ならば、今度は、この六人で彼女達に頂きの景色を見せてあげたい。

特に、ここにはアイドルを夢見、破れ、再び立ち上がったあの娘には、もう二度と一緒に活動できないあの娘にとつて、今この瞬間が最高の時であるようにしたい。

そういう意味もあり、この曲も手を抜けない一曲なのである。九人が揃い、大きな舞台で、沢山の観客の前に立つことは、本選で最後だ。

「花陽、これまで踊った曲の振り付けって覚えてる？」

「ええ？ ど、どうだろう……。怪しい部分もあるかなあ」

花陽は指を折りながら思い出す姿を見て、真姫は九人で始めて踊った曲の前奏を弾く。すると、花陽の目から不安そうな色は消え、小さい手振りであるが踊ろうとしてた。凜は瞳を輝かせて、鼻歌交じりにステップを踏む。

「凜、これ分かるよ！ かよちゃんは？」

「だ、大丈夫」

「良かった。じゃ、これは？」

と、真姫は予選用の曲を弾くと、凜は眉を寄せたが、花陽はしっかりと頷いた。それから立て続けに何曲か弾くと、花陽は全ての曲の振り付けを覚えていた。

「花陽ちゃん、凄いやよ！」

「かよちゃん、凄いやあ〜！」

穂乃果と凜に挟まれる花陽は照れたように笑い、自信がなさそうに言う。

「私、繰り返し見ることしかできないから……」

「それでも、こうして覚えているのは立派なことですよ。振り付けはオマーヂュで？」

「その方が良いでしょう？」

「ありがとうございます」

「お礼を言われるようなことじゃないわよ」

「その気持ち嬉しいんです」

微笑む海未に、真姫は照れ隠すように語気を荒らげた。

「私が新しい曲を用意できないだけよ、勘違いしないで」

実際、穂乃果達二年生は生徒会のこともあるため、夏のように放課後全てを練習の時間に割けるようなことはできなくなっている。三年生は卒業を間近に控え、卒業式のことでも集まりにくくなっている。

真姫がいくら新しい、質の高い曲を用意できたところで、結果的に質の低いパフォーマンスになることは避けられないことだろう。

絶対に回避したいことであるため、こうして皆ができる振り付けや曲調にした。

「真姫ちゃん、衣装はどうするの？」

「講堂で使ったのをアレンジしない？」

「あれを……？ 穂乃果ちゃんと花陽ちゃんは、その、大丈夫？」

「だ、大丈夫だよ、ことりちゃん？ 私はダイエツトに成功したんだよ？ そう心配することないよ？」

「正月で体重増やした人が何を言っているんですか？」

「海未ちゃんあれは違うの、あれは事故。そう事故なんだよ。そうだよ、花陽ちゃん？」

「花陽を巻き込まないでください」

「わ、私は別に」

「ほら、海未ちゃん、花陽ちゃんもこう言っているじゃん」

「私は穂乃果ちゃんみたいなことしてないから……」

六人がそんなことを話していると日はすぐに暮れ、穂乃果とことりと凜と花陽は我に返ったように音楽室から出て行った。

真姫はまだピアノの前に座り、ずっと九人で歌う最後の曲を奏で、どこをどう変更しようか、このままでいいのだろうかと考えていた。

ピアノの隣には、海未が何枚もの紙に詩を書き殴っていた。真姫はそんな海未に、こう尋ねる。

「どんな詩にするつもりなの？」

「曲調が曲調ですから、明るい詩にしようと思っっています」

「聴きに来たお客さんが笑顔で帰れるようにね」

「そうですね。でない、と、にこが怒ります」

「にこちゃんきつと、泣くわね」

「穂乃果も泣くでしょうね」

「皆、泣くんじゃない？」

「真姫も、ですか？」

「どうかしら？」

「泣くと思います。嬉しくて」

「……そうね」

真姫は詩を作る彼女に、優しくこう語りかけた。

「ねえ、海未、本当にありがとう。詩、作ってくれて」

海未は詩を作る手を止め、ゆつくりと落ちていく夕日を眺めながら、こう言った。

海未の瞳の奥の揺蕩う幾条もの雫を見て、真姫は静かに耳を傾ける。

「私は真姫や凜や花陽より、一年、たった一年ですけれど、早く生まれてきました。穂乃果やことりとは幼馴染みですけど、二人のようにはなれません。」

穂乃果のように皆を引つ張る力なんてありません。ことりのように皆のために衣装

を作るほど器用ではありません。絵里や凜のように特別踊りができるわけでもあり

ません。にこや花陽のようにアイドルに詳しいわけでもありません。希のように導き、

道を示すこともできません。真姫のように音楽に秀でているわけでもありません。

ですが、こうして、今、真姫の隣に居ます。真姫の作る曲はどれも不思議です。あ

れほど作り上げるのに苦労しているのに、完成した曲は、どれも微塵もそんな姿が見えませんか。

楽しくて、嬉しくて、自然と皆が笑顔になる。そんな曲ばかりです。だから私は、あなたが嬉しそうに弾く素敵なお曲を少しだけ手伝うだけです」

「……詩人ね」

「そうでしょうか？」

「詩人よ。海未の詩は、素敵よ」

「ありがとうございます。真姫、この曲が最後だって、寂しいこと言うのはよしませんか？」

「……もう一曲作る？」

「作れませんか？」

「作れるわ」

六人が三人のために作った曲が最後になるのではなく、皆のための曲が最後にしたい。

別れを一切感じさせない底抜けに明るい曲を、皆のこれからを祝福する、門出を祝う曲こそが、真姫達九人には似合うのではないだろうか。

それがアイドルなのではないだろうか。真姫は少なくとも、三年生のあの娘にそう教えられた。

「でも、詩、大変よ？」

「大丈夫です」

「本当？」

「はい」

「まだ書けてないの？」

「何とかします……」

「それじゃ、お願いね」

真姫は笑顔を浮かべ、最後に相応しい曲を作ろうと適当にピアノを弾き始めた。

五

——がんばってがんばってその先で

素敵なことが起きるよ——

真姫は卒業式を終えた音楽室で、九人のために作った最後の曲を口ずさんでいた。真姫はいつものようにピアノの前に座り、傍らに立つ矢澤にこを見上げた。にこの胸元に靡く薄ピンクのコサージュを見ると、今更ながら込み上げてくるものがあった。笑って、にこの門出を祝いたかった真姫は、溢れ出ようとする涙を懸命に堪え、にこの視線から逃れるように窓へ目を遣った。

外にはいつしか桜一色となっており、風が吹く度に軽やかに揺れる。窓を開ければ、濃い香りが漂ってきそうだった。にこは真姫の歌声を聞き、嬉しそうに声を弾ませる。

「良い曲じゃない」

「でしょ？ 海未が頑張ってくれたのよ」

「何か弾いてよ」

「何かかって？」

「何でもいいいわ。今日で聞けないと懐うから」

「もう弾いたじゃない」

真姫はこの頼みを、悲しい微笑をもって拒んだ。

今、にこのために弾ける曲は沢山ある。彼女と出会ってから、真姫は沢山の曲を作り、聞き、弾けるようになった。仰々しいクラシックの旋律から今にもステップを踏んでしまいそうなポップスまで弾けるようになった。

しかし、どれもが、別れを惜しむ寂しい調子を孕んでしまうと分かっている真姫は、どれほどにこが望んでも、首を縦に振れなかった。

にこはそんな真姫の気持ちを汲み取ったのか、話題を転換させる。

「真姫ちゃんはどうするの？」

音楽と向き合って、詩を歌い、衣装を考え、苦手な振り付けを身体に叩き込み、一つだけ分かったことがある。誰かの幸福のために生きるのも悪くない。皆の笑顔を見て、真姫は心からそう思った。

真姫は、己の運命を受け入れることにした。

「医者になるわ。でも、何も捨てないわ。何も捨てず、医者になるから。にこちゃん

は？」

「……頑張つてね。私はアイドルになるわ」

医者とアイドルという各々の道を歩んでしまえば、途端に会えなくなる。片や地元に残るが、二四時間三六五日受け入れ可能な総合病院で働くとなれば、いつ休みになるか分からない。

休みの日でも、気付けば病院に居るようなことも有り得る。アイドルは休みが定かではない。互いに休みを合わせようと思つたところで、合うとは到底思えない。

同じ目的を持ち集つた仲間と、地位も趣味も違う、それでも同じ志を持った友人と、何故、一年も経たずに別れなければならぬのだろうか。真姫は寂しくなり、堪らず、弱音を吐いた。

「皆、違う所に行くのね」

「そんな顔しないで大丈夫よ。また会えるわ」

「またつていつよ……」

「それは誰にも分からないわ。何事も少しずつ、変わる。肌で感じることでできないほど微細だけど、確実に変わるわ」

「変わらないものなんてないのね」

「そうかもしれないわね。でも……」

言葉を切つたにこの瞳の端に寂しい気配が漂うのを見て、真姫は期待を込めて訊く。
「でも？」

「何でもないわ」

には答えなかった。真姫はその言葉に、変わらないものがある、と続くのだろうと思つたが、真姫はそういうことを信じられないでいた。

最も近くにいた父親と母親を見て、そういう言葉を信じられない。心のどこかで打算的に物事を考えているに違いないと思う懐疑的な己がいるのだ。

「ねえ、にこちゃん、一つだけ訊いていい？」

「何よ？」

「この一年、どうだった？」

そう訊いた時、にこの瞳から弾けんばかりに大粒の涙が零れ、真姫は胸の底が熱くなるのを覚えた。彼女の小さな肩が動きながら、震える声を隠さずに伝えようとする言葉を待つ。

「良くなかったなんて言えるわけじゃないじゃない。歌って、踊って、一杯のお客さんを笑顔にさせて、幸せじゃなかったなんて言えるわけじゃないじゃない。別れたくないのよ、皆と別れたくないよ……」

その叫びを皮切りに、にこの心中にあつた言葉が波のように部屋に響いた。

「ずっとずっと一緒に居たかったの。でも、でも、そんなの……!!」

「大丈夫、大丈夫よ、にこちゃん。皆、また会えるわ」

にこの震える身体を包むように抱き留めると、容易く折れてしまいそうなほど細いことに気付いた。には抵抗することなく、真姫の胸の内、不安を打ち明ける。

「またつていつよ」

「分らないわ。でも、絵里も希も穂乃果も海未も私もこの街で暮らすから、きつと近い内よ。」

私が医者になって、絵里が先生になって、穂乃果が看板娘になって、海未が家業を継いで、希は……何でしょうね、分からないけど、絶対この街にいるから。だから、ね、泣かないで。笑って……」

そこから先は言葉にならなかつた。真姫はにこに背を向け、掌に零れ落ちてくる温かいものを両手で拭うと、九人の再会を哀願するように、壊れそうな旋律を奏でる。この曲は、真姫がまだ幼かつたあの日、ピアノのレッスン室に通っていたあの日、家にあるアップライトピアノを給仕に掃除させ、弾けるようになったあの日、自分の気に入つた音を適当に並べたものである。

その時、詩はなかつた。音ノ木坂に入学し、放課後にピアノに触れ、歌いたくなつて、初めて詩を作つた。

——愛してるばんざーい！　ここで良かった。

私達の今がここにある。

愛してるばんざーい！　始まつたばかり、明日もよろしくね。

まだ、ゴールじゃない——

涙で濡れた声では、伝えたいことの半分も伝えていないかもしれない。こんな曲は、にこに似合わないかもしれない。にこにはもつとアップテンポな、リズムカルな

曲が似合うことだろう。

そんなこと分かっているけれども、真姫はこの曲を弾いたのは、今日が初めてである。

にこがそうだったように、真姫もまた彼女達と出会えて、良かった。にこに伝えてしまえば、満足してしまい、時に流れ、二度と会えないような感覚に囚われ、唇を噛んだ。

別れの時、真姫は決まって、そんな感覚に囚われ、正直に自分の気持ちを伝えられなかった。中学三年生の時も、そして今も。

代わりに、こうして歌でしか伝えることできない。曲が終わった時、にこは穏やかな笑顔を真姫に向けた。その顔の端々にまだ泣き顔を残しているようで、真姫は笑うように泣く女の子を思い出していた。

「真姫ちゃん、またね」

「……うん、にこちゃん、また会いましょう」

真姫が何ヶ月か振りに、一人で家へ帰った。給仕の和木から一通の手紙を受け取り、差出人を見て、真姫は慌てて部屋に籠った。

彼女に手紙を出したのは、高校最初の春である。穂乃果達に半ば強引にスクールアイドルに加入させられしばらく経った頃だ。

『まこちゃんへ』

元気ですか？ 私は今——スクールアイドルのこの活動をしています。

夏休みにこつちに帰ってくる機会があったら、ぜひライブを見に来てほしいな！
そうしたらメンバーに紹介しますー」

中学の同級生だった尾崎まこは夏休みの間、ライブに来なかった。文化祭の準備だとか水泳の練習だとかで来れないことを、まこらしい柔らかな返事で来た。

『真姫ちゃんへ』

夏には行けなかったライブ、観に行けて良かったよ。ラブライブ優勝おめでとう。
初めて見たライブで、あんなに沢山のお客さんに囲まれている真姫ちゃんを見て、大丈夫なのかな……って不安がっていた私を許して。

だって、私の知っている真姫ちゃんはスクールアイドルなんて、何それ？ 興味ないですって断つちゃうような高嶺の花だったから。

あの真姫ちゃんがスクールアイドルなんてやってるって知って、びっくりして、本当かなって思ったけど、ステージの上で輝く真姫ちゃんを見て、嬉しかった。

皆と一緒に夢中になって、私達を自然と笑顔にさせちゃう真姫ちゃんはやっぱ凄い子なんだなって。どんどん違うステージへ行っちゃう真姫ちゃんを見て、本当、オトノキに行つて良かったなって思います。

中三のあの日、替え玉受験をしよう、っていったあの日のことを、真姫ちゃんは覚えてるかな？ 結局、替え玉受験はしなかったけど、私がオトノキへ行つても、今の真姫ちゃんのようにスクールアイドル活動をしている未来なんて描けません。

あの真姫ちゃんの手を見て、本当に真姫ちゃんはオトノキへ行つて良かった。

全寮制だから中々そつちへ帰る機会はありません。でも、帰った時、また行きます。その時は、メンバーを紹介してね』

六

スポーツ新聞の片隅に、新人アイドルの記事を見付け、真姫は微笑ましい気持ちになり、思わず買った。

まさか自分の二五歳の誕生日を、手術室で迎えると思っていなかった。二六の誕生日は飛行機の中で、そこから先は脳外科の勉強一色に埋め尽くされ、ようやく日本へ帰つて来れた。

真姫はてつきり都内の大病院で研修や研究だけで済ますと思っていたのだが、父親の縁もあつて、アメリカに留学した。医者たるもの最先端の医療を体験してこい、とは父親の言葉である。

脳というものに挑む以上、複雑な神経組織を扱うことになる。外科医に望まれる技術は必然的に高いものとなる。となれば、最先端の医学を経験した方が良いだろう。真姫は同年代の医師と比べて、知識や論文方面については少なからず自信があつた。色々なものが読める環境にあつたからである。

しかし、アメリカでの真姫の評価は、ちよつと知識のある研修医である。真姫はそう評された時、初めて、同期の誘いもあつて、キャメルの甘い煙草を吸おうとしたが、

寸でのところで留まった。

ここで吸ってしまえば、この声が変わってしまふ。そうなつてしまえば、一時の安らぎは得られるが、何か大切なものが壊れてしまふように思つた。

寝られない日が続き、見上げた夜空は高層ビル群が邪魔をして、全然美しくない。ピアノも何だか日本の時の音色と違い、満足に弾けなかつた。写真だけが増え続けた。真姫は何度か日本に帰ろうかと思つた。しかし、今帰つてしまえば、父親に見放されてしまふだろうと思ひ、帰るに帰れなかつた。

帰りたいのは対人面での言葉の壁は勿論のこと、大量にある論文の把握にも時間を要し、自信が碎かれたのも大きい。買ひ替へた辞書はすぐにボロボロになつた。

何故、医者だけがこうもハードな日々を送らなければならぬのだろうかと思つた。自分が答えはすぐに出た。人間の身体にメスを入れる以上、何かしら反応が起きる。良いこともあるが悪いことも起きるだろう。そういう症例と向き合ふなければならぬ。自分が嫌だからといつて、見たくないからといつて目を背けることは許されない。

高い技術と正しい知識を有し、最先端の医療を提供する義務がある。

それが脳外科医となれば、より一層、注意深く、長期的に接しなければならぬ。総合的脳神経だけではなく、一分野に特化した専門中の専門でなければならぬ。

そう考へた結果、真姫のアメリカ留学は、父親と真姫自身が想像した時よりも一年だけ長くなつた。

そして、今日、ようやく帰つてきた。真姫が音ノ木坂に戻つてきた頃、小雪がちら

つきはじめている。駆け足気味に家へ帰ろうと思ったのだが、高校の頃になった個人経営の喫茶店や本屋はシャッターを下ろしており、真姫の足は自然と家とは別の方向へ向かった。

その店は淡い光を放ち、暖簾を潜れば、明るい声が真姫を迎えた。

「いらつしやいませ」

テイクアウトだけでなく、イートインもできるように店内の一角に和の装いを凝らした漆のテーブルと椅子が数脚並んでいる。

店頭に立つ女の顔は、どこか幼さの残っている柔らかい顔立ちをしていた。背は少し高くなつたように思えるが、真姫を見て笑つた太陽のような笑みはあの時と寸分も違わなかつた。

真姫は微笑を浮かべて、店長おすすめと書かれている六方焼と温かい緑茶を頼んだ。「済みません、これと、温かい緑茶を一つ」

真姫の澄んだ声を聞いた店員は目を瞠り、形の良い桜色の唇から詠嘆の音を零した。

「……真姫ちゃん？」

「ただいま、穂乃果」

「うん……うん！ お帰り！ 綺麗になつたね」

「穂乃果もね。大人びて綺麗になつたわ」

「本当？ あ、海未ちゃんに会つた？ 海未ちゃん凄いだよ」

真姫は席に座り、穂乃果の言葉を聞いた。

どうやら、海未もここに残っているらしい。家業を継いで、弓道と日本舞踊の先生をやっている。音ノ木坂学院に教えてに行ったりしているとのことだった。

ことりは服飾の専門学校を卒業して、日本で数年働いた後、その資金でイギリスへ短期留学をしているとのことだ。音ノ木坂学院を初めてラブライブで優勝させたデザイナーということだ、スクールアイドルの衣装製作を頼まれることもあったようだ。凜と花陽は新宿のどこかで働いているらしい。長期の休みの日には、高い日本酒を引つ提げ、希の所で飲んでいるとのことだ。希は巫女として神社で生活を送っているとのことだった。

絵里は音ノ木坂学院の教壇に立ち、大学進学と地元の就職に強い、生徒達が自分のやりたいことを叶えられる学校として、学校共々有名になっていくらしい。かつて廃校の危機があったというのは、遠い昔のことになっていくようだった。

その話題の中で、矢澤にこの名前はなかった。音ノ木坂学院を卒業してからどうなったのか、断片的に知っているだけだった。

「にこちゃんは？」

「それが不思議と誰も知らないの……」

「大学は？」

「分からないよ」

そう答える穂乃果の目に思っていたよりも暗い色が光らなかつたのは、にこがもう大人になっているからだろう。

きつと誰も深く踏み込まなかったのは、互いが大人になり、自分の生活があるからだろう。同時に、あのにこならば、どこで生きているだろう、という不思議な信頼が七人にはあった。

真姫にもその信頼は存在していた。にこならば、どこで、小さいながらもアイドルとして活動していることだろう、と。

「まあ、にこちゃんだしね」

真姫はそれ以上は深く問わず、穂むらを出た。

実家に近付く度に真姫は自分の顔がどんどんと険しくなるのが分かった。父親と最後に会ったのは、日本を出る前日である。

どんな会話をしたかは覚えてないが、励ましの言葉を送られた記憶だけは残っている。

数年振りに再会した父親はいつものように書斎のデスクに居た。父親はいつものように深みのある低い声で訊く。

「どうだった？」

「大変だったわよ」

父親は、真姫の記憶にいた顔立ちよりも疲れ、白髪が増え、目の下には消えることのない隈が薄つすらとこびりついている。

「収穫はあっただろう？」

「ええ」

「なければ、お前も留学させた意味がない」

「でしようね」

父親の背に並ぶ本の数々は、数年前と変わらず医学論文の間にソクラテス、アリストテレス、エピクロス、パスカル、アラン、ラッセル、マズローなどがある。

父親はデスクから一枚の書類を真姫へ見せた。書類に目を通した瞬間、真姫の血が凍った。

『矢澤にこ』

書類にはそう書いてある。

七

「これは、何？」

真姫は震えた声で訊いた。こんな形で再会したくなかった。あの中で、誰よりもアイドルになりたがったにこが、何故、こんなことになっているのか分からなかった。

どこかで事故に巻き込まれたのだろうか。あるいは、テレビ出演の時に発生してしまった事故でもあったのだろうか。

考えても答えがまとまらず、真姫は父親を睨むように答えを急かした。父親は相変わらず落ち着き払った調子で答える。

「私も詳しくは分からない。医局長から知らされたことだ。前医から医局長へ。そし

て、私の所へ来た」

「いつ？」

「お前がアメリカにいる間だ」

「何それ！ どうして言ってくれなかったの！」

真姫は声を荒らげた。

書類には頭痛が続いており、入退院を繰り返していると書かれている。一年の間、精密検査を受けていないとなれば、どれほど進行しているか想像できない。一刻も早く、ここに伝えなければならぬ。

「本当に帰って来れたのか？」

父親の鋭い眼光に、真姫はすぐに答えられなかった。仮に、にこのことをアメリカで聞いたとしても、帰国には時間を有する。加えて、留学を途中で投げたしまえば、真姫だけではなく、西木野総合病院の名誉にも関わる。

日本に居るたった一人の患者のために、真姫は果たして本当に帰って来ることができたのだろうか。帰って来るのではなく、電話で、父親に国内に在住する腕の立つ医者を紹介するように頼んだのではないだろうか。

自分よりも技術があり、情に厚い医師に、にこの未来を託したのではないだろうか。しかし、一人の友人として、にこの現状を知りたかったのは事実である。

「……分からないわ。でも、それでもっ！」

「己の力量を把握して、誰かに願うのは恥ではない。一人の医師として、患者と向き

合い、そういう選択を採ったのならば、誰も文句は言わない」

「友達一人助けられなく、何が医者よ！」

「そう感情的になるな。感情を高ぶらせてどうなる？ この患者を助けられる、と？」

真姫は父親を見据え、力強い調子で言い切った。

「助けられるわ、絶対。私を馬鹿にしないで。西木野総合病院のお嬢様にできないことなんてないのよ」

「……お前そこまで言うのならば、この患者を任せよう」

「当然よ」

真姫はそう言つて、父親の書斎から出て行つた。

留学のことだかとか、医者になつたことだとか、脳外科医の専門家になつたことだとか、そういうことを褒めてもらえると思つていたかつての自分を押し殺し、真姫はにことどういふ顔で立ち会おうかと考える。

にこにアイドルの極意を教えてもらつた。アイドルは観客を笑顔にさせ、魅了させる存在なのだと言き込まれた。

暗い曲は駄目だと言われた、小さい振り付けは駄目だと言われた、いつでも明るく、泣くなど言われた。

三年間のスクールアイドル活動が楽しかった、嬉しかったと言われた。

その矢澤にこに、再び会えると言われた。忘れもしない卒業式の後のことだ。何故、医者と患者という立場で会わなければならぬのだろうか。

この再会が、真姫が医者になった代償なのだろうか。音楽も写真も天体観測も捨て、医者になった報いだというのなら、これほど残酷な運命はない。

何人もの患者と向き合い、メスを握り、死を目撃した果てに、何故、にこを見なければならぬのだ。

一人の友として再会を分かち合いたかった思いを懸命に胸底に沈み込ませ、真姫はようやく一人の医師として書類を読むことができた。

『三年前から頭痛や肩の痛みが続き、一週間前から後頭部や肩にも痛みが広がり、近くの前医受診。後頭神経痛と判断される。経過観察も、特変なし。現在、内服薬なし』
前医は音ノ木坂にある小さな診療所だった。専門的な設備が整っていない診療所ゆえ、そういう診断を下された可能性はある。

前医の誤診かもしれないが、問診だけで大病院や総合病院への紹介状を書き、CT検査の依頼をするのは難しいことのように思えた。

真姫も頭が痛むことがある。一定の期間で痛むわけではなく、雨の降る前やアメリカで数多くの症例に携わった時など状況は様々である。にこも同じようなことが続き、ひとまず、診療所へ行ったということだろう。

前医の情報はそのだけではなく、入退院を繰り返していることも書かれている。東京に留まらず、九州や関西の大病院の名前が書かれている。

前医もにこに検査入院を勧め、西木野総合病院へと辿り着いたのだろう。矢澤にこという名前を調べれば、新聞記事やネットニュースが出て来た。扱いはど

れも小さかったが、にこがアイドルとしてグループを組み、バライティー番組に出演したことやグループ解散後、ドラマに出演したことが書かれている。

現役を退いた、ということも書かれている。日時は、真姫の手元にある頭痛の時期より前だった。にこの現役引退は、芸能界にとつて衝撃だったらしく、各社が前メンバーとの不仲説だとか事務所との関係だとかそんな憶測が幾つも目に付いた。

あのにこがそんなことを理由に、アイドルを引退すると思えない。にこも己の身体に異変が起きていることは気付いていたことだろう。

しかし、にこのプライドが病名を打ち明けることを許さなかったのである。

真姫は一層、にこを助けなければならぬと燃えた。真姫はにこほどではないが、アイドルというものを知っている。病についても知識はある。脳神経外科のスペシャリストとして日本へ戻ってきた。

今、にこを再び、アイドルとしてステージに立たせられるのは真姫しかない。真姫は家を飛び出し、にこの実家へ走った。

※

久し振りに会ったにこは随分と陽の光を浴びていないようで、記憶の中の時よりも白く、痩せていた。羨ましかった艶やかな黒髪も手入れが行き届いていないのがすぐ

に分かった。

真姫は平静を努めたがすぐに、にこを外へ連れ出した。にこを家に居させてしまえば、真姫は彼女の身に何があつたのかばかり気になつてしまい、全然話を動かせる気がしなかつたのだ。

適当なコートを羽織らせ、腕を引いた。文句を言うにこに何とも答えず、真姫は厳冬の中を歩いた。軽かつた身体は、一層軽くなつたように思え、冬の厳しい風を受ければどこかへ飛んでいきそうだった。

適当なカフェに入り、真姫はようやく優しい調子でこう切り出す。

「何年振りかしら？」

「覚えてないわよ」

淡白な声音にも、真姫は努めて笑つた。にこは真姫を訝しむように睨みながら、強い口調で訊く。

「それで、何？」

「調子はどう？」

「三十超えた大人が自己管理一つできなくてどうするのよ」

「そうは言うけど、案外、ね？」

「……分かつてるわよ」

真姫はその一言に、思わず、何が分かっているのか尋ねたくなつた。しかし、真姫の心は、そう問うた時に返つて来るにこの言葉を想像できず、彼女の問いに対する満

足な答えが用意できず、訊けないでいた。

訊ければ、事は早く済むであろうが、真姫は、にこがアイドルを諦めたのではないか、という真実に触れるのが恐ろしかった。

永遠に真姫の推論であつてほしかった。が、にこの心身を見れば、嫌でも勘付いてしまう。病が原因で、にこは夢を諦めてしまった。

にこは今、どん底で暮らしている。アイドル業界は、輝かしい世界から滑り落ちた少女を再び救い上げるような優しい世界ではないのだ。

言つてしまえば、にこの代わりなどいくらでもいるという証明に他ならなかった。穂乃果や海末のような家業ではなく、絵里や真姫や希のように安泰というわけではない。

花陽や凜のように一定のことさえやれば良いという職でもない。

ことりのように不安定なものなのだ。幸い、ことりにはまだ家が残っている。地元に戻れば、何かしら職に就けることは可能なのだ。加えて、ことりの場合、個人の技術も高い所に位置している。衰えが見えた頃、ことりは人に物を教える立場に立っていることだろう。

あの中で最も不安定だったのは、誰でもないにこだったのである。若過ぎた真姫達は、誰もが、にこならばアイドルになつて活躍すると信じていたからこそ、彼女の背を押した。

その結果、羽ばたいたにこは真つ逆さまに地へ墜ちた。病の進行により翼をもがれ、

かつての友人は各々の仕事を全うしており、にこだけがみすぼらしい姿になった。かつての居場所には新しい、若いアイドルが笑顔を振り撒いている。にこの心に残ったのは、どうしようもない好きと、気持ちをやえられない後悔だった。

真姫はまるで鏡を見ているような気分になった。真姫の場合、好きを諦めても、医者という最後にして最悪の砦があった。しかし、にこの場合、何も残っておらず、胸の内で燻らせることしかできない。

真姫は優しく、にこに伝える。

「私はにこちゃんのこと全然知らないわ。でも、一人の医師として、一人の友人としてこれだけは言えるわ。生きて」

にこは低い声で、真姫を拒んだ、

「何も知らないから言えるのよ」

「だって、教えてくれないじゃない」

「お医者様には関係のないことなのよ」

「一人の友人にも言えない？」

「……ええ」

真姫は衝撃を受けたが、答えの内に躊躇いがあつたのを聞き逃さなかった。にこは真姫が大学で勉強に励んでいる頃、沢山の大人と話し、知り、別れたことであろう。夢をやえ、アイドルになれたのに拘らず、たった一つの病が原因で、大人達はにこ達のから一斉に離れた。

にこは大人達に振り返ってもらおうと、働きかけたことだろう。その結果、高校の時にそうだったようにグループ間で不仲を引き起こし、引退させざるを得なくなつた。にこの心に残つたのは、莫大な猜疑心とである。最も心を通わせた友人達とは疎遠になり、彼女等の成功を好ましく思わない心ばかりは膨れ上がった。

何故、にこだけがこのように取り残さなければならぬのだろうか。何故、己だけが、という問いの答えを導けず過ぎたことだろう。

運が悪かつたの一言で片付けられる問題ではない。運の一言に片付けてしまえば、運が良ければもう一度舞台に上がれるのか、と期待を見出し、再び絶望してしまうことだろう。

にこを再び輝かせるためには、病を治すだけでは足りない。身体の治療だけではなく、心のケアに重きを置かなねばならない。

真姫は思い切つて、己の考えを述べた。

「にこちゃん、私の父親から、あなたのこと聞かされたわ」

「……どういうことよ？」

「頭痛のこと」

と、真姫が言えば、にこの顔色が変わつた。薄くなつた頬に血の気が走つたように紅潮していた。けれども、瞳は沈んでおり、暗い色を漂わせている。

「検査してみないと確かなことは言えないけど、可能性として、クモ膜下出血、脳腫瘍、中耳炎、副鼻腔炎といったものが考えられるわ。もしも膜下出血となれば、入院

して、手術つていうのもあるのよ」

「十分知つているわよ。経過観察を選んで悪い？」

「悪くないわ。でも、だつたら、せめて、今と向き合つて。あの時は大丈夫だつたら、あの時と変わらないだろう。そんなものを信じないで」

変わらないものと変わるものがある。

にこがどれほど願つても、病は進行する。

真姫がどれほど願つても、あの青春時代には戻れない。

戻れなくても、こうしてにこ再会できた今がある。にこの背は、あの時と比べて僅かだが高くなつてゐる。

にこのアイドル活動は一度終わった。かつて、にこから同じ志を持った高校生達が居なくなつたように。

その先はどうだつたらうか。絵里と希がいて、穂乃果がやつて来た。穂乃果はアイドルに詳しいわけでも、音楽ができるわけでも、何か一芸に秀でている少女ではなかつた。

しかし、真姫とにこが持つていなかつた素直さを持つていた。どこかおつちよちよいな一面もあつた。自然と穂乃果の周りに人が集まつた。

あの素直さが羨ましいと何度思つたことだろう。何度、あの娘のようになりたいと願つたことだろう。

恥ずかしくて、別れが恐ろしくて、自分の気持ちを正直に打ち明けられなかつたあ

の時とは違う。再会できた今ならば、にこに言える。

「にこちゃん病でアイドルを諦めるなんて、そんなの、私が医者になった意味がないじゃない。皆が皆、夢を叶えたのに、どうして、にこちゃんだけが、そんな、そんなの許さないんだから……」

「夢を叶えるためには捨てなきゃいけないのよ」

にこは静かに、ぽつりとこう呟いた。真姫は激昂し、裏返った声を上げた。

「私は何も捨てなかつた！ ピアノだって弾けるわ！ 歌だって歌える！ 星も、全て、全て捨てずに医者になつたのよ！」

真姫の叫びを受け、にこは初めて愕然とした様子で、まじまじと真姫を見た。

「病が何？ 頭痛？ 脳の異常？ あなたの前に居るのは誰？ 西木野真姫よ。あの西木野総合病院のお嬢様よ。脳外科医のスペシャリストで、この町で、誰よりも矢澤にこを知っている女よ。」

あなたにもう一度ステージに立つてほしいと願っている女よ！」

にこは眉を寄せ、吐き捨てるよう冷酷な調子で言う。

「ステージに？ 馬鹿言わないでよ。無理でしょ。手術してリハビリして、それから踊れるようになるまでどれくらいかかると思ってるのよ」

「どれくらい時間がかかってもいいよ。絶対あの輝かしい舞台へ立たせてあげるから。大丈夫、心配しないで。皆、笑顔で、あなたを迎えてくれるから」

「……笑顔で？」

そう訊いたにこの声に予期せぬ喜びを覚え、真姫は明るい調子で頷いた。大切なことを教えてくれた人に、自分の大切な思いを伝えられなくなるのは嫌だった。

真姫は正直な気持ちでこに伝える。今、にこの心を氷解させるのは沢山の言葉ではない。正直で、素直なたった一つの言葉である。

「もう、一人じゃないよ。九人揃ったら、何だつてできるわ。そうでしょ？ 私達みんなだから」

真姫の言葉を聞き、にこの艶やかな瞳から大粒の涙が溢れ落ちた。声をしゃくり上げるにこを、真姫は優しく見守っていた。

八

翌朝、西木野総合病院へにこが来た。撮り終えたCTとMRAの説明に入った時、にこの顔は驚愕に染まっていた。過去の検査と明らかに違うところがあつたのだらう。真姫はクモ膜下腔の血管が枝分かれしている所にできている大ききの違う二つの瘤を見ながら、冷静に説明する。

「矢澤さん、貴女の脳の血管、ここですね、こぶになっているのが分かりますか？」

「前のもつと小さかつたのよ」

「だから、経過観察もできた、と？」

「ええ」

「このまま経過観察を続けると……このこぶは血流に押される形で、そうですね、一度、風船のようにどんどんと大きく膨らみます。そして、風船が破裂するように、薄い部分に破裂して、クモ膜下出血が引き起こされます」

この動脈瘤の厄介なところは、頭部動脈瘤破裂によりくも膜下出血を引き起こす確率の低さにある。一〇〇人中、二人程度だ。

破裂しないからといって、様子観察を行ってしまえば、患者は強いストレス環境に支配される。そのストレスが原因となり、自立神経失調症を患う可能性もある。

患者が高齢であれば、本人の全身状態を考慮して、様子観察と指示することもある。ここはまだ若い。幸い、にこの動脈瘤は二つ共、まだ破裂していない。が、一つの瘤は三、四ミリ程度であるが、もう一つの瘤は一センチはある。

「みたいね。でも、破裂する人って少ないんでしょう？」

「はい。ですが、矢澤さんの場合、こちらが危ないです。前医や他の先生から聞いたかもしれないが、動脈瘤は大きいければ大きいほど破裂率は上がります。

加えて、この瘤が二・五センチを越えるようになりますと、圧迫されて様々な症状が起これると思われます」

真姫はそれから、こう続ける。

「一人の医師として、同時に一人の友人として、様子観察で帰したくないわ」
「それじゃ、どうする気よ？」

「血管内治療、開頭クリッピングのどちらかを行います」

「血管内治療？」

「血管塞栓術とも呼ばれている術式です。血管からコイルを通して、瘤に埋め込みます。ただ……」

真姫は瘤の根本に目を遣って、説明する。

「この根本から出ている血管、これは別の血管です。この瘤をコイルで塞ぐことによつて、この血管を詰まらせてしまう危険性が高いんです」

「今は大丈夫なんでしょう？」

「今は、です」

「この方法だと、頭を開くことないから、安全で、回復も早いってどこかの先生が言っていたわよ」

「そうですね。ですが先程も申し上げました通り、詰まらせる危険性だけではなく、非常に繊細な作業となります。脳動脈を通すカテーテルが脳動脈瘤や脳血管を突き抜けることによつて、合併症を引き起こす可能性もないわけではありません」

「怖いと言わないでよ……」

「申しわけありませんが、危険性を知っていただくことも大事ですので」

真姫はそれから、もう一つの方法であるネッククリップ術の説明を始める。

頭を開き、動脈瘤と親動脈との間をクリップで留める。頭を開き、頭蓋骨に穴を開け、脳内を手術するとなれば、身体への負担が大きく、重い後遺症が残る可能性がな

いと断言はできない。

もし、にこの脳内にある瘤が小さければ、真姫は血管塞栓術を勧めた。が、一センチの瘤を見付け、その選択を押し進められるわけがなかった。

また、血管塞栓術はコイルの安定性や動脈瘤の状態を知るために経過を追う必要がある。アイドルとして再びステージに立とうとするにこに、そういう時間が用意されるとは思えない。

これまでも様子観察を続けてきたにこが、逐一病院に来ると思えない。ここまで引つ張り出すのも大変なことだった。

ただでさえストレスに晒される環境にある彼女を、病院へ来させるのは真姫が思っているよりもストレスを増幅させるかもしれないのだ。

課題は手術だけではなく、術後にもある。頭部動脈瘤の危機から脱したところで、にこが再びアイドルとして働けるのかと言えば難しい段階であろう。

にこはしばらく宙をぼんやりと見て、こう言った。

「ねえ、真姫ちゃん、その手術を受けて、大丈夫かしら？」

色々な意味を含んだ言葉だった。手術の不安も勿論あることだろう。いくら真姫が執刀するといつても、他人に己の肉体を預けることが怖いはずがない。

術後のことも不安だろう。にこは頭部動脈瘤により失った時間を取り戻さなければならぬ。踏み外してしまった人間が這い上がるのは体力だけではなく根気が必要となる。

く。

「結局、占い通りになったわね」

「カードやからね」

「星のタロットカード正位置なら、希望、閃き、願いが叶う。逆位置なら、失望、無
気力、高望み、……放棄、だったかしら」

「よく調べたやん」

「気になっただけよ」

穂乃果の声に、真姫と希は会話を切り上げた。

「ねえ、にこちゃん、ことりちゃん、今、どこにいるか知ってる？」

「知ってるわけないじゃない」

「アメリカだよアメリカ！ 何でも、舞台のデザイナーやってるんだって！」

「凄じくない」

「ねえねえ、にこちゃんもトップアイドルになって会いに行こうね」

「そんな先の話されてもねえ……」

「トップアイドル、否定せんの？」

「ええ。もう、逃げない。全部捨てると思っていた娘が、何一つ捨てなかったんだか
ら」

それから穂乃果や希は他愛のない話をする、病床のこを気遣うように出て行っ
た。

入院生活で暇を持て余すにこに、真姫が渡したのは一冊のアイドル雑誌だった。

「何これ？」

「読んでみなさいよ。良い記事だから」

真姫に促され、にこはぺらぺらとページを捲りはじめた。アイドルの写真が飾られる中に、一つの短い特集を見付けた。

『忽然と姿を消したアイドルは今』

という見出しを見て、にこは興味を失ったようにつまらなさそうに記事を読んでいたが、ライターの名前を見て、目の色を変えた。

「……花陽？」

「そうよ」

「知ってたの？」

「にこちゃんのことを話しただけよ」

「凄いいじゃない」

にこを瞳を輝かせ、記事を読む。記事は忽然と舞台から降りたアイドル達を紹介しながら、一人のアイドル好きなライターとして、彼女等の復活を、再びステージとして立つことを祈ること。その一端を担うはずだったライターが、彼女達を追い込んでしまい、復活の機会を奪ってしまったのではないだろうか、という反省で締め括られている。

「花陽らしい良い文章だわ。読む？」

「もう読んだわ。良い文章だったわ。花陽らしい優しく、温もりに溢れた良いものだったわ」

「そうね」

ここは雑誌を閉じ、外の星々を見ながら、微かに熱の帯びた調子で言う。

「私、花陽はアイドルになると思っていたのよ」

「でも、ならなかった」

「恥ずかしいから？ 緊張するから？」

「そんなネガティブな理由じゃないのよ」

「知っているの？」

「ええ。同級生だから」

花陽の将来の夢を聞いたのは、真姫が医学部への合格が決まり、花陽が私立の特待生になった頃だった。

『私よりアイドルになりたい娘は一杯いると思う。そんな娘が活用できなくなった時、また活用できるように働きたい、かな……。アイドルへの思いは誰にも負けないから。また輝くステージに立ってほしい』

あの花陽がはつきりと自分の意志でそう述べたのだから、真姫も凜も止めず、花陽の背中を押した。

にこの瞳に漲るものを見て、やはり彼女はアイドルとして復活させなければならぬいと真姫は思う。

「……そう、じゃ、最高のステージにしないといけないわね」

「まずはしつかり休みなさい」

真姫はそう言つて、にこを寝かしつけながら、窓から見える星々を見ながら、かつて父親がそうしてくれたように、数多く流れる星に、にこの回復を祈りながら、星のことを話す。

「にこちゃん、あの星、東の方に白く輝く星が見えるでしょ？」

「どれよ？」

「あれよ、あの丁度、三角で結べる所。近くに一杯星があるじゃない」

「あー、あれね。あれがどうしたのよ？」

二人は、宿直の看護師が来るまでの間、互いに星を見上げ、かつての時を取り戻すかのように話していた。

退院の日時が決まった初夏、にこは、

「ねえ、真姫ちゃん、ピアノ弾いて」

と言つた。真姫は変わらないにこの心音を確認した後、動揺を悟られないように柔らかに笑う。

「退院したらね」

「……えー、今は？」

「駄目よ。こんな所で弾いたら迷惑でしょ？」

あの時、勢いに任せて、ピアノもできるといつたが、もう五年近く弾いていなかっ

た。触ることは何度かあったが、何か一曲弾くまで至らず、数音鳴らす程度だ。

誰かに聞かせる曲など、それこそ、高校三年生の最後の曲以来ではないだろうか。真姫が自分で作った曲ではなく、名前も知らない下級生から、メンバーの皆で歌ってください、と頼まれた音源をアレンジした程度だ。

そこまでピアノに触れる時間が減つたのは大学や仕事が忙しいのもあるが、家にあつたアツプライトピアノが、父親の一存により捨てられたのが大きかった。

いくら真姫がピアノを好もうが、弾く環境を失つてしまえば、弾こうにも弾けない。頭の中で音符を繋げるのも限界がある。

指先に神経を集中させ、一心不乱に弾くという感覚は、実物でなければできない。今指先に染み付いている感覚はメスぐらいだ。音楽の感覚を取り戻すとすれば、一朝一夕のことではないだろう。

にこの退院する日まで一週間もない。これから練習したところで、どこまで取り戻せるか分からない。しかし、にこの門出を祝うのに、下手な曲は弾きたくなかった。その日、真姫が病院から帰ることができたのはそろそろ日付が変わろうかとする頃だった。病院を出ると、見慣れない明るい色の車が停まっており、ドアの所に一際明るい髪色の女が立っている。

高校の時と比べると随分と背丈が高くなり、後数センチで真姫と並ぼうとしていた。中性的な恰好をしていたが、真姫を見る瞳や揺れる唇は真姫よりも全然女性らしくかった。

「お疲れにや？」

星空凜がにこの見舞いに来たのは、面会時間終了間際だった。病室へ飛び込んで来たかと思えば、花束を看護師へ投げ、にこの様子を見て、帰った。

真姫がにこの病室へ駆けた時、凜の姿はなかった。ただ、にこの口から、凜が見舞いに来た、と聞いただけである。

「そりゃ、疲れるわよ……」

「乗る？」

「ありがとう」

真姫は行き先を告げず、凜の運転に任せ、ピアノの問題をどう解決しようかと考えていた。

曲が頭の中にあり、指と脳が音を覚えていても、真姫は不安で仕方がない。微妙な力の加減で響きが変わることを、真姫は高校の時に嫌というほど味わったのだから。

真姫は長い息を吐き、ミラー越しに凜を見て、心労を打ち明ける。

「にこちゃんがピアノ、弾いてほしいんだって」

「誰に？」

「私に」

「真姫ちゃん、弾くの！ じゃ、凜、踊るよ。凜、バックダンサーもやってたから全然できるよ！ 海未ちゃんも絵里ちゃんも、希ちゃんも、皆、呼ぼうよ！」

「そんなの恥ずかしいから嫌よ」

「真姫ちゃん照れ屋さんにや〜」

「弾いてないんだから仕方がないじゃない」

「買うの？」

「絵里に頼んでみるわ」

「絵里ちゃんに？」

「休みの間だけ、貸してって」

「休みの日だけ現れる赤毛の先生。とつてもロマンチックだね」

「そう？」

「うん。ねえ、真姫ちゃん、凜も真姫ちゃんも高校生だった時、絵里ちゃん達がまだ
ムに居た頃の春だったかな？ 二人で星を見たこと、覚えてる？」

「……そんなこともあったわね」

「あの日、凜、何をお願いしたか言ったっけ？」

「さあ、覚えてないわ」

「皆が戻って来ますように、って。互いの夢、道のためにバラバラになっても、一日
だけ、……贅沢なら一時間、もつと短くてもいいんだ、互いが互いの顔を見て、笑い
合えるような。そんな時があっても良いなっと思うの」

「だから、年末、戻ってきてるの？」

「かよちゃんから聞いたにや？」

「穂乃果から聞いたのよ」

「そつか……」

穂乃果の名前を出した時、凜は淋しそうに笑った。その笑みを見て、あの早春の夜の願いは、凜の願いであると同時に穂乃果の願いでもあるのだ、と思つた。

あの時、あの中で地元に残るのが確定していたのは、地元に構えている海未と穂乃果だけだつた。絵里達を送り、凜達に送り出される二年生の二人だけだつた。

凜はその鋭い嗅覚で、そんな先のことまで感じ取っていたのだろう。

思い返すと、歌える限り歌つたあの時が、走れる限り走つたあの時が、涙と共に溢れてきた。真姫は指で拭いながら、こう言う。

「大人になつて一つだけ分かつたことがあるわ」

「凜もだにや」

『涙脆くなる』

二人は声を揃えてそう続け、顔を見合せて笑つた。

十

久し振りに会つた絵里は、随分と聡明な女になっていた。ロシアの血が一層見え、髪や瞳から冷やややかな印象を受けたが、言葉回しは穏やかで、真姫の知っている絵里だつた。

「ありがとう」

「良いのよ」

「こんなに小さかったかしら？」

「真姫が大きくなつたのよ」

「そうかしら？」

「そうよ。じゃ、ごゆつくり」

出て行くこうとする絵里を引き止め、真姫は絵里のために一曲弾こうと一声かける。

「一曲どう？」

「勘を取り戻したらね」

音楽室のピアノは、真姫が卒業した時と変わっていない。鍵盤蓋を開けると、真白な白鍵と黒鍵がある。真姫は弾んだ笑顔を浮かべ、一音を鳴らす。

清らかな音が広がる。真姫は全身が震え上がり、続けて、音を鳴らす。どんとどんと嬉しくなつて、次々と音を鳴らす。立つたまま、鍵盤に両手を置き、指の赴くままに奏でる。

高校の時と比べて瑞々しい、新鮮さはなかったけれども、低く、深い味わいが、演奏者の心の動きが不思議なまで旋律に乗る。

自然と頭の中に詩が描かれ、凜とした声が喉から溢れ出る。

始まりはここだった。家にピアノがあるのに、学校のピアノがどんな音が鳴るのか気になつて、夢中になった。穂乃果と出会ったのもここだった。全部、ここだった。

医者になれた、星も写真もピアノも捨てずに。

——やり遂げた、最後まで。

「良い音じゃない」

真姫のピアノに引き寄せられるように、にこが音楽室へ来た。真姫は晴れやかな笑顔で、堪らなくてなつて叫んだ。

「にこちゃん、歌つて！ 一緒に！」

「は？ あんた、……もう、仕方ないわねえ」

にこも一瞬驚いたように目を瞠つたがすぐに笑い、真姫とにこは自然と同じ歌を歌つた。にこの歌声はお世辞に上手いといえないが、彼女の顔に振り撒かれる笑顔に、真姫は嬉しくなつてまた笑つた。

——愛してるばんざーい！ ここで良かった。

私達の今がここにある。

愛してるばんざーい！ 始まったばかり、明日もよろしくね。

まだ、ゴールじゃない——

後書き

この本は、本来ならば同人誌として作られなかった。『西木野真姫の幸福論』を書き終え、にこまきを書くことはないだろうと思っていた。しかし、サークル『榊魚屋』の榊氏が書かれた『Happy maker は流れない』を読み、『みんなで叶える物語』を書くに至ったのである。

『西木野真姫の幸福論』は、二〇一三年一二月末に書いた。この作品に関しては『ラブライブ!』一期を見た時の解釈、思いを残しておきたかったため、誤字脱字の修正を行った程度である。文章も、二〇一三年の頃のものであるため読みにくいかもしれない。

『みんなで叶える物語』は二〇一五年三月中旬に書いたが、頒布する上にあたり、結末を大きく変えた。加筆前の原稿は pixiv にアップロードしているので、各自で読んでいただければ幸いである。

にしきのまき こうふくろん
「西木野真姫の幸福論」

みなかな ものがたり
「みんな叶える物語」

発行日：2015年05月10日 初版

原作：ラブライブ！

発行者：近藤貴弥（サークル『出藍文庫』代表）

連絡先：stkk7.920521@gmail.com

印刷：ワンブックス

本書の無断転載・複製・無断転売等を禁じます。
